

# 第11回 日本セルフメディケーション学会 講演要旨集

テーマ

## セルフメディケーションの実践と安全性の担保

年会長

城西国際大学薬学部 教授

懸川 友人

会 期

2013年10月5日(土)～6日(日)

会 場

城西国際大学 東京紀尾井町キャンパス

第11回日本セルフメディケーション学会事務局

〒273-8555 千葉県東金市求名1番地

城西国際大学 薬学部 生理化学講座内

TEL : 0475-53-4569 FAX : 0475-53-4571

E-mail : selfmedi@jiu.ac.jp

<http://www.self-medication.ne.jp/event/>

## 会場案内

城西国際大学 東京紀尾井町キャンパス

### ◆住所・電話番号

〒102-0094 東京都千代田区紀尾井町3-26

TEL. 03-6238-1300

### ◆交通アクセス



— 東京メトロ有楽町線 — 東京メトロ銀座線 — 東京メトロ南北線  
— 東京メトロ半蔵門線 — 東京メトロ丸ノ内線 — JR線

### アクセス インフォメーション

- 東京メトロ有楽町線 麹町駅1番出口より徒歩3分
- 東京メトロ半蔵門線・南北線 永田町駅9a番出口より徒歩5分
- 東京メトロ丸ノ内線・銀座線 赤坂見附駅D出口より徒歩8分
- JR中央線・総武線 四ツ谷駅より徒歩10分

## 交流会 会場案内

### ホテル ルポール麹町

#### ◆住所・電話番号

〒102-0093 東京都千代田区平河町 2-4-3 ・3階 ガーネットの間  
TEL. 03-3265-5361

#### ◆交通アクセス



会場見取り図



#### ◆開催日時

2013年10月5日(土) 17:30~18:30

## 第11回日本セルフメディケーション学会の開催に際して

認定NPO法人セルフメディケーション推進協議会

会長 池田 義雄

副会長 上原 明 生出 泉太郎 関口 信行 鶴田 康則

認定 NPO 法人としてのセルフメディケーション推進協議会 (SMAC) は「国民に対して、わが国におけるセルフメディケーションの推進と定着に関する事業を行い、生活者を主体とする病気の予防・治療、健康の維持・増進をはかり、保健、医療そして福祉の増進に寄与する。」ことを目的として活動してきています。

本協議会は設立以来日本薬剤師会、日本OTC医薬品協会、日本チェーンドラッグストア協会、日本生活習慣病予防協会など本協議会の活動趣旨にご賛同頂いている団体、企業並びに個人の皆様のご支援とご協力のもとに幅広い活動を展開しています。

現在、本協議会が注力している事業としては、2本のネットによるセルフメディケーション活動推進のための情報提供と、今回で11年目に入った「日本セルフメディケーション学会」の開催、加えて東日本大震災復興支援活動としてセルフメディケーションの立場から被災者向けの健康支援「東雲プロジェクト」、その他地域との連携を視野に嶋野、安田両理事を中心にした「みなと区民まつり」並びに棚橋理事が尽力されている「くらしフェスタ東京」への参加などが数え上げられます。

さて今年度の年会長は本協議会理事、城西国際大学薬学部生命科学分野教授の懸川友人先生です。高齢者医療と在宅医療を中心とした、地域医療を担える人材（薬剤師）の養成に力を注がれている中で、本学会のメインテーマを「セルフメディケーションの実践と安全性の担保」とされ、シンポジウムと教育講演各2題を取り上げ、ポスター発表ともども2日間にわたる本学会を有意義なカタチで企画されています。折しも薬業界はOTC薬のネット販売、そして初の生活習慣病関連薬のスイッチOTC・エパデールへの対応で揺れ動いています。この機会こそはセルフメディケーション推進の好機だという認識のもと本学会の成果に期待するところ大です。

一方全国の薬局、薬店、ドラッグストアが地域の健康ステーションとなってセルフメディケーションを推進していくためには身体情報の入手も欠かせません。その最重要手段が採血検査で、薬局等での薬剤師のサポートによる「自己穿刺採血」のすすめです。この学会を通じて生活習慣病関連の医療用薬のスイッチ化の促進を訴えるとともに、増え続けている糖尿病対策の一環ともなる自己穿刺採血による血糖、HbA1C（ヘモグロビンエーワンシー）測定並びに自己尿糖測定の推進についても強く願っていく所存です。

最後に今回も多くポスター発表がなされますが、この中から「セルフメディケーションを科学する」ことに主眼をおいた優れた示説に「セルフメディケーション推進協議会 (SMAC)

賞」が授与されます。乞うご期待！

# 第11回日本セルフメディケーション学会

## 「セルフメディケーションの実践と安全性の担保」

### の開催にあたって

年学会長 懸川 友人  
城西国際大学薬学部 生理化学 教授

認定 NPO セルフメディケーション推進協議会は、安心できる健康の維持と安定した医療費の確保を両立する「セルフメディケーションの実践」によって「健康で活気あふれる 21 世紀の生活環境を作る」、広報と実践のための 200 のテーマを掲げて活動しています。目的を同じくする、本学会では、生活者のためのセルフメディケーションの推進を、学術的な側面から検討していくことを目的として、毎年学会を開催していますが、本年は 10 月 5 日（土）、6 日（日）に城西国際大学 東京紀尾井町キャンパスにおいて開催する運びとなりました。

今回は「セルフメディケーションの実践と安全性の担保」をメインテーマとしました。初日に、「ダイレクト・スイッチ OTC 医薬品の新展開」を企画しました。言うまでもなく、新しい効能を持った OTC 医薬品を提供することは顧客に益をもたらしますが、顧客のニーズに応える新たな OTC 医薬品を適正に使用できるよう、情報の収集と正しい理解が販売に関わる以上、求められます。各シンポジストの皆様は現在開発が進行しているダイレクト&スイッチ OTC 医薬品をご紹介します。2 日目は、メインテーマである「セルフメディケーションの実践と安全性の担保」を、セルフメディケーション支援を実践する、情報提供者、そして顧客の立場の各シンポジストからお話いただきます。OTC 医薬品やサプリメント、健康食品の実効性や安全性を確保するためのどのような工夫が必要なのか、消費者からのニーズを理解しどうこたえるか、熱く語っていただきます。

教育講演 1 では、OTC の認可に携わった立場から、OTC 医薬品の問題点と展望について鋭く深く紹介いたします。また医療用医薬品に比べて OTC 医薬品の臨床研究は質・量ともに不足しているのは事実です。そこで教育講演 2 では、OTC 販売の現場での「理想の薬剤師卒後教育」について紹介いたします。

セルフメディケーションに携わる他（多）職種の方々との出会いを楽しみながら、情報共有、意見交換、懇親・交流の場としての 2 日間としていただければ幸いです。

# 第11回日本セルフメディケーション学会

年会長 懸川 友人（城西国際大学薬学部）

平成25年10月5日（土）、6日（日） 城西国際大学東京紀尾井町キャンパス

## プログラム



### 第1日目 10月5日（土）

- 12:00 受付開始・開場
- 12:50 ポスター掲示（12:50 までに掲示） 【地下1階 ホワイエ】
- 13:00 開会の辞 【地下1階 多目的ホール】
- 池田 義雄 会長挨拶  
懸川 友人 年会長挨拶
- 13:15-15:10 シンポジウム 1 【地下1階 多目的ホール】
- 『ダイレクト・スイッチ OTC 医薬品の新展開』  
座長：安川 憲（日本大学薬学部 教授）
- 「スイッチ OTC 医薬品の現状と将来」  
黒川 達夫（慶應義塾大学薬学部 医薬品開発規制科学講座）
- 「生活習慣病を対象とした日本初のスイッチ OTC 医薬品「エパデール T」」  
大槻 哲嗣（大正製薬株式会社 商品開発本部 商品企画部）
- 「ダイレクト OTC 医薬品としての西洋ハーブ」  
安川 憲（日本大学薬学部 教授）
- 「日本初！足のむくみを改善する西洋ハーブ医薬品」  
澤村 淳（エスエス製薬株式会社 研究開発本部メディカル&CROグループ）
- 14:40-15:10 質疑・応答
- 15:15-16:15 ポスター示説 【地下1階 ホワイエ】
- 16:15-17:30 教育講演 1 【地下1階 多目的ホール】

座長：堀江 俊治（城西国際大学薬学部 教授）

『OTC 医薬品の問題点と展望』

児玉 庸夫（城西国際大学薬学部 教授）

17:30-18:30 交流会 【ホテル ルポール麹町・3階 ガーネットの間】  
**第2日目 10月6日（日）**

8:30 受付開始・開場

9:00-11:00 シンポジウム2 【地下1階 多目的ホール】

『セルフメディケーションの実践と安全性の担保』

座長：懸川 友人（城西国際大学 薬学部 教授）

「ハーブ&サプリによる症状緩和の実践」

酒井美佐子（ピオセラクリニックピオセラクリニック薬剤部 NATHERA  
（ナセラ） 薬剤部長）

「漢方の実践」

針ヶ谷哲也（(社)金匱会診療所医療法人 社団金匱会診療所薬局長）

「リスクコミュニケーション：期待と現実」

北澤京子（日経 BP 社 日経メディカル副編集長）

「消費者へのセルフメディケーション教育のあり方」

今井聡美（納得して医療を選ぶ会 代表）

10:30-11:00 質疑・応答

11:10-12:10 教育講演2 【地下1階 多目的ホール】

座長：山村 重雄（城西国際大学薬学部 教授）

『理想の薬剤師卒後教育とは』

阿部 真也（株式会社ツルハ 調剤運営本部）

12:20-12:30 S M A C 賞発表 【地下1階 多目的ホール】

12:30-12:40：閉会の辞、次回年会長挨拶 【地下1階 多目的ホール】



# シンポジウム 1

## 「ダイレクト・スイッチ OTC 医薬品の新展開」

### 「スイッチ OTC 医薬品の現状と将来」

黒川 達夫（慶應義塾大学薬学部 医薬品開発規制科学講座）

## 「生活習慣病を対象とした日本初のスイッチ OTC 医薬品「エパデール T」」

大槻 哲嗣（大正製薬株式会社 商品開発本部 商品企画部）

### 「ダイレクト OTC 医薬品としての西洋ハーブ」

安川 憲（日本大学薬学部 教授）

## 「日本初！足のむくみを改善する西洋ハーブ医薬品」

澤村 淳（エスエス製薬株式会社 研究開発本部

メディカル&CROグループ）

座長：安川 憲（日本大学薬学部 教授）

第1日目 10月5日（土） 地下1階 多目的ホール 13:15-15:10



## シンポジウム 1『ダイレクト・スイッチ OTC 医薬品の新展開』

### スイッチ OTC 医薬品の現状と将来

黒川 達夫

慶應義塾大学薬学部 医薬品開発規制科学講座

スイッチ OTC 医薬品に限らず、OTC 医薬品全般に共通して欠けるものは何か。それは日本国民全体が関係する保健や医療の中で、どのような立ち位置となるのか、どのような役割と責任を負うのか、という戦略的な視点である。例えば今後医療需要や健康への関心度が高まると予想されるわが国で、健康や医療行政の考え方を示す「健康日本21（第2次）」（平成25年4月実施）では、「栄養ケア」はあっても、「セルフケア」、「セルフメディケーション」などの用語は見あたらない。まして OTC 医薬品はその片鱗すらないのである。これは現在の医療や保健衛生活動の中で、何ら役割を与えられていない OTC 医薬品の現状を示す象徴の一つに過ぎない。

その一方で、OTC 医薬品は約6000億円の市場規模を持ち、国民からはそれだけの対価を支払う価値ある消費財と見なされていることが分かる。しかし、その内容を見れば、1分類全体で500億円に届かない小さな薬効群の集合であり、現在の国民の健康・疾病状態に十分マッチしている形とは思えない。

振りかえってわが国の医療を見ると、組合健保の多くは赤字に苦しみ、多忙な勤労者は受診を控え、さらに今後増えるのは75歳以上の人口のみという現状から、「このままではどうにもならない。何とかしなければならぬ」という待った無しの社会となっている。OTC 医薬品、中でもスイッチ OTC 医薬品は、先の薬事法改正で効き目の鋭い医薬品が登場する途が開け、本来この問題に大きな解決策をもたらすものと考えられる。

話題となっているメタボリックシンドロームを背景とする疾患では、高血圧は40歳以上の男性では6割、女性では4割が該当し、脂質代謝異常症は潜在患者を入れれば2200万人と指摘されている。こういった2人に1人のような疾患では、そもそもリスクを分散させて相互扶助機能を発揮させる保険メカニズムは機能し難いことは明かで、新しい概念を適用し、取り組まなければならないであろう。

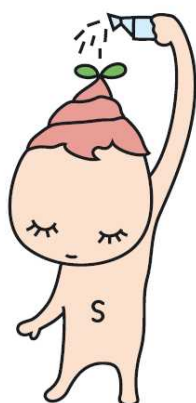
これらを総合し、例えば国民の2割、3割が「その状態にある」疾患は、疾患という概念に入れるのではなく、日本人として生きることによる自然の在り様（よう）と見なし、現在の枠組みから脱却した対応を考えるべきである。現在の保険医療の枠組みだけでなく、それに加えて薬局や薬剤師、保健師などによる教育啓発活動、これらの領域に有効性を持つスイッチ OTC 医薬品の活用などを積極的に見直し、総合的に取り組むことが有用と考える。医療需要の増加圧力に対しては、そうしない限り財政的にも人的にも成り立たないのではないかと。

それにしても、やはりOTC医薬品の保健医療における立ち位置の明確化や、積極的な役割をアピールし提案することが必要である。ここは従来万全であったとは言えない。現在の保健医療における困難さは、サプライサイドの工夫や努力では解決できず、OTC医薬品の活用を含むデマンドサイドの働き、すなわちセルフケアやセルフメディケーションの確立にむけた努力と基礎となる調査や提案、その理論的な整備が求められる。

### [ SMACキャラクター ]

「自分で二葉を成長させる」=セルフメディケーションを表す4人のキャラクター。  
SMACの頭文字から名前をつけ、「癒す」「知る」「運動する」「食べる」を表す。

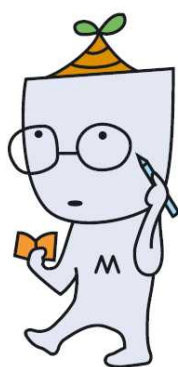
アウトライン+カラー



セルフィ

.....

SMACのS  
心、癒しを表す  
水(薬)を与えて  
二葉を成長させる  
眠るのが好き



マナブ

.....

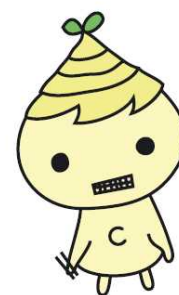
SMACのM  
知識、学びを表す  
知ること  
二葉を成長させる  
メモ帳を持ち歩いている



アンさん

.....

SMACのA  
身体、運動を表す  
運動して  
二葉を成長させる  
太極拳が日課



くっこ

.....

SMACのC  
食を表す  
食べて  
二葉を成長させる  
いつも箸を持っている

## シンポジウム 1『ダイレクト・スイッチ OTC 医薬品の新展開』

### 生活習慣病を対象とした日本初のスイッチ OTC 医薬品「エパデール T」

大槻 哲嗣

大正製薬株式会社 商品開発本部 商品企画部

「エパデール T」は持田製薬株式会社が医療用医薬品として製造販売している高脂血症・閉塞性動脈硬化症治療剤「エパデール」を OTC 医薬品に転用した、生活習慣病を対象とした日本で初めてのスイッチ OTC 薬である。1 包中に有効成分として EPA（一般名：イコサペント酸エチル）600mg を含有し、健康診断等で指摘された境界領域（正常値よりもやや高めの 150mg/dL 以上 300mg/dL 未満）の中性脂肪値を改善する。

本剤は 2008 年の厚生労働省審査管理課長通知での医療用医薬品から OTC 医薬品への転用開発推進を受け、翌年、製造販売承認申請を行い、3 年以上の歳月をかけ、2012 年 12 月に承認を取得した。本剤には通常の製造販売後調査（PMS）に加えて、OTC 医薬品では初めてとなる適正使用調査の実施が承認条件として課せられており、現在、店舗を限定して調査を実施中である。

生活習慣病は加齢とともに増加し、国民医療費の増大への影響も懸念されるため、早めの段階での予防、治療が求められており、生活者の運動、食事、禁煙といった生活習慣の改善・実践とともに、本剤のような OTC 医薬品を医療関係者の適切な指導の下、使用することは有用だと考えられる。今後、本邦における医療分野の全体最適としての視点から生活習慣病領域のスイッチ OTC 薬推進において、本剤は試金石となりうる。「セルフメディケーションの実践と安全性の担保」という本会のテーマに沿い、本領域について、課題や今後の展望について議論を深めたい。

## シンポジウム 1『ダイレクト・スイッチ OTC 医薬品の新展開』

### ダイレクト OTC 医薬品としての西洋ハーブ

安川 憲

日本大学薬学部

西洋ハーブという言葉は、様々なイメージを想起するようである。香辛料、ハーブティ、アロマなど、ヨーロッパを中心に日用品や食品に伝統的に使われる安全な有用植物類という意味合いであろうか。一方で、西洋ハーブの中には、医薬品として用いられる薬用植物もある。赤ブドウ、イチヨウ、エキナセア、セントジョーンズワート、ノコギリヤシ、バレリアンなどである。これらは、様々な疾患に対する効能を有しており、生体に対する作用が比較的高いと考えられる。正しく使わないと危険なものも存在する。しかしながら、食経験も無い国内において、法規的には食品として取り扱われているのが現状である。

最近、この状況を改善する取り組みのひとつとして「外国において一般用医薬品として汎用されている生薬製剤を一般用医薬品として製造販売承認申請する際の取扱いについて（薬食審査発第 0322001 号）」が呈示され、赤ブドウ葉の抽出エキスを有効成分とする西洋ハーブ医薬品が承認されている。医薬品と食品の最も大きな違いは、製品の品質である。有効成分が製品に表示どおりの量で含まれていること、有害成分が含まれていないこと、基原植物、採取部位、抽出条件、製造プロセスが明確で、医学的な根拠に基づき用法用量が確立されていることである。

西洋ハーブの多くは、医薬品としての開発された経験を持つものが多い。しかし、研究の結果は、単一成分の効果ではなく、多くの成分の共同効果であることが確認されてきた。この研究過程で、有害成分の除去、より有効な抽出溶媒とその分画の設定等の研究がされて医薬品として承認されている。サプリメントにはエビデンスがあるといわれるが、西洋ハーブ医薬品によるものであって、植物・抽出物のものではない。特に、有害成分を含有するイチヨウ葉、医薬品との相互作用が問題となっているセントジョーンズワート等は、早急に医薬品として扱うことで国民の安全を担保できると考える。西洋ハーブ医薬品とサプリメントの違いを理解し、正しく訴求することで、国民の健康増進につながると共に、更なる西洋ハーブ医薬品の上市に期待する。

## シンポジウム 1『ダイレクト・スイッチ OTC 医薬品の新展開』

### 日本初！ 足のむくみを改善する西洋ハーブ医薬品

澤村 淳

エスエス製薬株式会社 研究開発本部メディカル&CROグループ

エスエス製薬(株)は、足のむくみを改善する西洋ハーブ医薬品「アンチスタックス」を本年6月より発売開始致しました。このアンチスタックスは、日本で初めて赤ブドウ葉から抽出されたエキスを有効成分とした医薬品です。軽度の静脈還流障害により、ふくらはぎや足首のむくみ、むくみに伴う足のだるさや疲れなどの諸症状の改善に効果をあらわします。

むくみといっても原因は様々です。まず、全身性のむくみか局所性のむくみかを見分けることが重要で、全身性のむくみの場合には、心疾患、肝疾患、腎疾患、内分泌系疾患（甲状腺機能低下症など）、薬剤性浮腫などが原因として考えられ、原因疾患の診断・治療が重要となります。一方、アンチスタックスの使用対象となるむくみの誘因は、運動不足や長時間の立ち仕事、座り続けたままにしていることなどです。特に、下肢は重力により圧力がかかっていますので、ふくらはぎの筋肉を使わないと、局所的に血圧が上昇し静脈内に障害が生じやすくなります。そうすると血管内から血管外への水分が外へ浸み出て細胞外に水分が貯留するため、下肢にむくみが起こり、末梢での炎症を引き起こします。症状としては、夕方になると足がだるくなる、重い、突っ張る、痛いといったことが起こります。

アンチスタックスの有効成分「赤ブドウ葉乾燥エキス混合物」は、薬理試験により血管透過性抑制作用による血管強化、血液凝固抑制作用による血流改善、抗浮腫作用によるむくみ抑制等が確認されています。また、海外ではダブルブラインドによる臨床試験が実施され、12週間服用により、下肢容積変化はプラセボ群と比較し有意な減少を認めました。日本で実施した一般臨床試験では最終評価時点（12週間服用後）において、むくみに伴う自覚症状の改善度にて判定された全般改善度において、中等度改善度以上の改善率81.0%を認めました。また3週、6週、12週と、週ごとに改善率は増加傾向を認めました。これら試験成績をもって2007年に発出された厚生労働省医薬食品局審査管理課長通知に準拠し審査が行われ、ダイレクトOTCとして承認されました。

「足のむくみ改善薬」「西洋ハーブ医薬品」という新しさとともに、日本には今まで医療用医薬品としても存在しなかった薬剤であるがゆえ、病態の理解、西洋ハーブの知識、そしてアンチスタックスの適応範囲など、まずは、より多くの方々にこの製品を正しく知っていただくことが非常に大切なことと考えています。そして、足のむくみに悩む患者様に適切にこの薬剤を使用していただき、セルフメディケーションの一翼を担う製品へと成長させたいと考えています。





# 教育講演 1

「OTC 医薬品の問題点と展望」

児玉 庸夫

城西国際大学薬学部 教授

座長：堀江 俊治（城西国際大学薬学部 教授）

第1日目 10月5日（土）地下1階 多目的ホール 16:15-17:30



## 教育講演 1 「OTC 医薬品の問題点と展望」

児玉 庸夫

城西国際大学薬学部 教授

城西国際大学大学院薬学研究科医薬品評価科学講座

国民のセルフケア意識の高まりから、OTC 薬の範囲に対する要望も変化している。OTC 薬はセルフメディケーションの手段として使用され、国民の保健衛生の向上に寄与すると考えられるが、薬局の一部は OTC 薬を取り扱わない状況で国民は効果的に利用できるのか、供給する立場の薬剤師は、臨床開発、適正使用、製造販売後安全管理への対応等の OTC 薬に係る課題にどのように臨むべきか、さらに規制当局の役割を述べる。

医療用医薬品の臨床開発において、医師は治験責任医師等として医薬品候補化合物の臨床薬効評価を行うが、OTC 薬の臨床開発に必要な薬局治験（使用実態試験等）推進の議論は進展せず、薬剤師は OTC 薬の臨床薬効評価に関与する機会がないため、上市された OTC 薬の有効性・安全性プロファイルに対して関心を持っていないと考えられる。スイッチ OTC 薬の場合、発売後の一定期間は第 1 類医薬品として薬剤師の管理下にあると規定されているが、厚労省が実施した覆面調査（調査期間：平成 25 年 1 月～2 月）において、第 1 類医薬品の販売状況を調査された 3,910 薬局・店舗販売業中、「文書を用いた詳細な説明があった」のは 60.7%（薬局 62.1%、店舗販売業 58.5%）で、薬局等に勤務する薬剤師は改正薬事法の趣旨を理解しておらず、国民に対する OTC 薬管理の責任を果たしていないことが明らかになった。

また、スイッチ OTC 薬発売後の PMS 期間における安全性情報のほとんどは開発企業の調査による収集で、薬局・店舗販売業の薬剤師による安全性評価に係る積極的なエビデンス作りは行われないため、PMS 期間終了後の薬食審医薬品等安全対策部会でのリスク区分の見直し審議において、薬剤師会側委員が開発企業から提出された一般的な安全性情報を基に、引き続き第 1 類に区分することを主張しても、賛成が得られないことが業界新聞等で報道されている。

現状では、薬剤師による OTC 薬の適正使用に対する取り組みは不十分で、いずれ第 1 類医薬品の販売は一定の資格要件（研修や経験年数等）を満たす登録販売者にも認めるべきとの意見も出てくると考えられる。OTC 薬は薬剤師から開発・管理されないことが問題点であり、規制当局は、相談薬局としての機能に必要な OTC 薬を配置する薬局に対する調剤報酬での評価や、適正使用推進に必要と考えられる薬局治験の実施に向けて法的整備を行うなど、薬剤師が OTC 薬を創り育てる役割を果たす施策を講ずべきである。



## シンポジウム 2

### 「セルフメディケーションの実践と安全性の担保」

「ハーブ&サプリによる症状緩和の実践」

酒井美佐子(ビオセラクリニックビオセラクリニック薬剤部

NATHERA (ナセラ) 薬剤部長)

「漢方の実践」

針ヶ谷哲也((社)金匱会診療所医療法人

社団金匱会診療所 薬局長)

「リスクコミュニケーション：期待と現実」

北澤京子(日経BP社 日経メディカル副編集長)

「消費者へのセルフメディケーション教育のあり方」

今井聡美 (納得して医療を選ぶ会 代表)

座長：懸川 友人(城西国際大学薬学部 教授)

第2日目 10月6日(日) 地下1階 多目的ホール 9:00-11:00



## シンポジウム 2「セルフメディケーションの実践と安全性の担保」

### ハーブ&サプリによる症状緩和の実践

酒井美佐子

ビオセラクリニック薬剤部 NATHERA (ナセラ)

セルフメディケーション学推進協議会(SMAC)ではセルフケアの観点から、日常生活習慣を改善し、疾病の予防、健康維持を図るための有効手段としてサプリメントの効用に注目している。そのためには製品に関する正確な情報、販売責任の確立が前提とし、消費者に自身の身体状況を把握し信頼できるアドバイザーを介して利用するように提唱している。

国民の3人に1人が日常的に利用しているといわれるサプリメントは dietary supplements に由来し、国内では「普通の食品よりも健康に良いとして販売される食品」を健康食品と称し、特別用途食品、保健機能食品制度により特定保健用食品、栄養機能食品を除いては法律上（薬事法および食品衛生法）の定義はない。このため、ほとんどのサプリメントは「いわゆるサプリメント」となり、健康増進目的や治療の補助として利用される食品であり、日本の制度上は食品に分類される。栄養機能食品は、ビタミン12種類ミネラル5種類で、1日摂取量の下限と上限が決められている。サプリメントの用いられる成分は、ビタミン、ミネラル、アミノ酸、脂肪酸、食物繊維など、私たちの身体をつくっている構成成分で日常の食事からも摂取できるベース（基本）サプリメントと、ハーブやその他、伝統医学や民間療法で使われるものや、欧米では医師が治療目的で使うオプショナル（機能性をもつ）サプリメントがある。注意すべきはこのオプショナルサプリメントの使用である。オプショナルサプリメントには有効性のエビデンスが示されているものが含まれるが、目的に応じて「摂取量」「摂取方法」「副作用の有無」「注意事項」「禁忌」「医薬品との相互作用」など、医薬品と同じように考慮すべき項目が多い。にもかかわらず、現状の消費者はネットや通販などの口コミや体験談の情報に左右されて購入するケースが多く、その人に合ったサプリメントを選択しているかが疑問視される。また商品の安全性についても不明なものも多く出回っている。

今回の講演では、クリニック内でのサプリメントに対する基本的な知識を消費者に伝える啓蒙活動について、ハーブ&サプリメントの症状緩和の実践を具体的に紹介する。

## シンポジウム 2「セルフメディケーションの実践と安全性の担保」

### 漢方の実践

針ヶ谷哲也

医療法人 社団金匱会診療所 薬局長

薬局やドラッグストアなどで販売されている漢方製剤を用いて薬剤師や登録販売者が来局者の症状や愁訴に合わせて処方を選択し、セルフメディケーションの支援を行うには病気に対する知識は勿論であるが、漢方の基礎概念（陰陽虚实表裏寒熱や気血水など）と処方を構成する生薬に対する知識が必要である。一般的に OTC 漢方製剤は医療用漢方製剤に比べ、1/2～2/3 のエキス含有量タイプが多いため副作用は出にくいと思われるが、最近は満量タイプという医療用漢方製剤と同じ含有量の処方もあるので注意が必要である。

OTC 漢方製剤の中でも副作用の起こる危険性がやや高いと考えられるものは麻黄、附子、大黄など作用の激しい生薬が含まれる処方と、作用は緩和であるが甘草の含有量の多い処方である。具体的には葛根湯、麻黄湯、小青龍湯、五虎湯、麻黄細辛附子湯、防風通聖散、大柴胡湯、芍薬甘草湯などがこれに該当するものと思われる。まず、麻黄はかなり注意が必要な生薬であり、服用することで胃腸障害、動悸、血圧上昇、興奮などの副作用が起こる場合がある。附子は、冷えや痛みに対して非常に有効であるが、適用を誤るとのぼせやほてり、動悸などが生じる。代謝を促し脂肪燃焼を期待され販売されている処方には大黄が含まれていることが多いが、便秘をしていない人が服用すると当然のことながら軟便になったり下痢気味になったりする。このような場合には予め大黄が入っている旨を伝える必要があると思われる。甘草は7割の漢方処方に含有されており、医療用の漢方エキス製剤では甘草が2.5g(グリチルリチン酸100mg)以上の場合に注意が必要とされているが、実際の臨床では1.5g(グリチルリチン酸60mg)でもむくみを生じたり、血圧が上昇してしまうことも経験している。このような場合には煎じ薬であれば甘草を0.5g(グリチルリチン酸20mg)にしたり去甘草にして対処している。また、難しい疾患の場合には2処方を合わせて服用(合方という)する場合も多く、甘草の総量には注意が必要である。その他希ではあるが山梔子を含有する漢方薬の10年以上長期服用により、特発性腸間膜静脈硬化症を来す場合があるという報告があるので、原因不明の腹痛や下痢、便秘、腹部膨満感が続く場合には注意が必要である。さらに、処方を問わずに肝機能障害を起こすケースもあるので長期服用をする場合には注意して経過観察することが必要である。

以上のように漢方薬を使用する際には処方の性質だけでなく、処方を構成する生薬の成分や作用などの知識が必要である。また、長期服用する際には定期的なバイタルのチェックや血液検査などの必要性が生じてくるものと考えられる。



## シンポジウム 2「セルフメディケーションの実践と安全性の担保」

### リスクコミュニケーション：期待と現実

北澤京子

日経BP社 日経メディカル副編集長

厚生労働省は6月に、「一般用医薬品のインターネット販売等の新たなルールに関する検討会」の取りまとめを公表した。取りまとめによれば、OTC薬の販売は「専門家と購入者側との十分なコミュニケーションの下で行われる必要がある」とあり、コミュニケーションに求められる機能として、(1) 専門家が購入者側から収集する必要がある情報を収集できる、(2) 専門家と購入者側とのやり取りに双方向性がある、(3) 専門家と購入者側とのやり取りが同時または遅滞なく適時適切に行われる、(4) 専門家から購入者側に対して受診勧奨が行える、(5) 販売後も購入者側からの相談を受け付けることができる——の5点が挙げられた。このことは、OTC薬の販売は、一般の商品の販売とは異なり、専門家（薬剤師）が購入者に情報を提供するだけでなく、情報を収集することの重要性を示している。そして、薬剤師がこれらを実行することにより、購入者の健康被害を未然に防ぐ、あるいは起こったとしても軽度のうちに発見し、適切な対応を取ることが期待されている。

だが、現実のコミュニケーション、特に副作用（リスク）に関するコミュニケーションは、(1) 薬剤師が購入者にリスク情報を提供（説明）するだけになっていないか（利益と害のバランス、重篤度と頻度とのバランス）、(2) 薬剤師が提供したリスク情報が購入者に正しく伝わっているか（専門用語、言葉づかい）、(3) 薬剤師が購入者から情報を収集できているか（購入者情報の蓄積、“かかりつけ”薬局）、(4) 薬剤師が収集した情報を適切にフィードバックしているか（副作用報告）——といった様々な課題があるように思われる。OTC薬販売において、薬剤師が「説明」「聞き取り」「報告」のいずれにもその専門性を発揮して初めて、薬剤師と購入者との間のリスクコミュニケーションが成り立ち、購入者のセルフ・メディケーションを支援できると考える。

## シンポジウム 2「セルフメディケーションの実践と安全性の担保」

### 消費者へのセルフメディケーション教育のあり方

今井聡美

納得して医療を選ぶ会

OTCの使い方や安全性（リスク分類を含む）に関する一般市民の知識、すなわちセルフメディケーションの「常識レベル」は千差万別である。平成24年度から、中学校における「くすり教育」が始まり、将来的には、消費者の大多数がセルフメディケーションの基本知識を身に着ける時代が来るものと期待される。

しかし、成人に関しては、網羅的なセルフメディケーション教育を実施する機会がなく、OTC使用の総論・各論のいずれに関しても、薬局やドラッグストアにおける薬剤師や登録販売者と消費者の対話が、実質的な教育機会になっている。今後、スイッチOTC化の推進が予想されることから、この現場での「教育」はこれまで以上に重要な意味を持つと考えられる。

私たちは、OTC販売制度改正前の2006年から2007年にかけて、9系列のチェーンドラッグストアおよび3系列のホームセンター（合計60店舗）において、指定医薬品（当時）B薬販売時の情報提供の実態を評価する覆面調査を実施した。今年度、その追跡調査を以下の要領で実施している。

#### 【対象薬】 I類・解熱鎮痛薬A薬

【購入者背景】 習慣性頭痛があり、これまでII類の解熱鎮痛薬を使用していた。頭痛の頻度が増え、薬が効きにくくなってきたことから、スイッチOTCのA薬を買いに訪れた。頭痛での受診歴はない。

#### 【評価項目】

- (1) 使用目的とA薬の使用歴を尋ねた（+5点）
- (2) 書面を用いて（あるいは手渡し）、A薬の特性を説明した（+5点）
- (3) 習慣性頭痛での受診歴を尋ね、自己治療の限界や受診の必要があることを伝えた（+5点）
- (4) 頭痛の対処法や、どの診療科を受診すればよいかなど、上記以外の有益な情報を提供した（+5点）
- (5) 誤解を招く／正しくない説明があった（-10点）
- (6) 無理に売りつけようとした（-10点）

この覆面調査の中間結果を報告するとともに、消費者への適切なセルフメディケーション教育につながる説明のあり方について考えてみたい。

キーワード：消費者教育、情報提供、スイッチOTC

## 教育講演 2

「理想の薬剤師卒後教育とは」

阿部 真也 (株)ツルハ調剤運営本部)

座長：山村 重雄 (城西国際大学薬学部 教授)

第1日目 10月5日 (土) 地下1階 多目的ホール 16:15-17:30



## 教育講演 2 『セルフメディケーションを支えるための薬剤師卒後教育とは』

阿部 真也

株式会社ツルハ 調剤運営本部

薬学6年制教育を受けた新人薬剤師の卒後教育も今年で2回目となった。4年制教育に比べると、OTC 医薬品に関わるカリキュラムも増えているが、各大学により特色があり、全ての大学で同じ内容とはいかないのが現状である。

今回、第一部として「薬剤師卒後教育における専門職連携教育（IPE）の果たす役割～薬剤師卒後教育へのIPE導入について～」と題して、専門職連携を実践するための教育に関して先駆的に2001年より発展してきた英国でのIPEについて概略を説明し、更に2007年より千葉大学において医学部・薬学部・看護学部の3学部協働で実施されている亥鼻IPEを紹介する。亥鼻IPEに協力していく中で、IPEの概念を現場薬剤師に広めたいと考え、薬剤師卒後教育への導入を試みたので、その結果を報告する。専門職連携は、チーム医療を支える上で必要不可欠なものである。薬局においては、登録販売者との連携が非常に重要であり、セルフメディケーションを支えるために、また、安全性を担保する上でも必要不可欠なものとする。

第二部は、「現場で役立つOTC医薬品接客対応教育の更なる充実を目指して」と題して、株式会社ツルハで実施しているOTC医薬品接客対応教育を紹介する。この教育プログラムでは、ロールプレイングを全部で3回実施するが、それぞれの回の研修にテーマを掲げ実施している。例えば、5月に実施する1回目は、あらかじめOTC医薬品に関わる情報や第1類医薬品の情報提供などの講義を実施したあとに、ロールプレイングを行い、5チェック・傾聴・共感を主な確認項目に設定し、その場で各受講者からフィードバックをもらう。いったん各薬局に戻り、その後、6月に実施する2回目では、あらかじめ副作用早期発見のための情報提供や、理想の服薬指導を目指してなどのグループワーク、症状判別概論などの講義を受けた後にロールプレイングを行う。2回目のテーマは副作用・受診勧奨であり、薬局トリアージを意識したロールプレイングとなる。7月に実施する3回目では、総合訓練として、それまでの内容にプラスして日常生活のアドバイスを必ず付け加えることをテーマとしている。以上のロールプレイングを現場と行き来しながら行うことにより、より実践的に、そして効率よく学んでいくことが可能となっている。薬剤師の卒後教育としてこの研修を実施・体験することにより、セルフメディケーションを支え、利用者の安心・安全に貢献できる薬剤師を育てていくことが可能であるとする。本日は、その一端を紹介したい。



# 一般演題

## ポスター発表

第1日目 10月5日(土) 1階エントランスホール 15:15-16:15





## P-1 ①OTC 医薬品関連

### 一般用医薬品と医療用医薬品の相互作用に関する研究 I ～お薬手帳を中心とした一考察～

○宮沢 伸介<sup>1)</sup> 大塚 麻衣<sup>1)</sup> 松山 喬門<sup>2)</sup> 足立 茂<sup>1)</sup>

1) 明治薬科大学地域医療コース 2) 株式会社カワチ薬局春日部店

【目的】近年、セルフメディケーションが推進される中、スイッチ OTC 薬の普及拡大などの要素も加わり、一般用医薬品の適正使用がより一層重要視されている。その問題の一つとして、医薬品相互作用による副作用防止があるが、従来からこの問題に対処するために、お薬手帳が利用されてきた。しかし一般用医薬品の購入時における、お薬手帳の活用は未だ十分でないといわれ、一般用医薬品と医療用医薬品の相互作用による問題を見逃す危険性があると考えられる。そこで今回、薬局に処方箋を持参した患者に対してアンケートを実施し、一般用医薬品と医療用医薬品の相互作用に対する患者意識を調査し、今後の課題について検討した。

【方法】アンケートはカワチ薬局春日部店（調剤併設型ドラッグストア）で実施した。調査期間は平成 24 年 2 月 1 日～29 日で、処方箋を持参した患者を対象に聞き取り形式で実施した。調査項目は医療用医薬品服用中における一般用医薬品の購入の有無及びその理由、購入する一般用医薬品の種類、購入時におけるお薬手帳の活用状況、医薬品相互作用に対する不安感等とした。

【結果・考察】処方箋を持参した 80 名の患者から回答を得た。医療用医薬品服用中における一般用医薬品の購入経験者は 45%だった。その種類は風邪薬や胃腸薬などで、その購入理由は軽症のため病院受診の必要性を感じないという回答が多かった。また、一般用医薬品購入時におけるお薬手帳の活用は 36 名中わずか 5 名であった。一方、この 36 名中 19 名が一般用医薬品と医療用医薬品の相互作用に対して不安が無いと回答した。その 19 名の医療用医薬品を薬歴で確認したところ、一般用医薬品との飲み合わせによっては、臨床問題を生じる可能性がある事が分かった。

【結語】従来、医薬品相互作用による副作用などを防止するために、社会的にもお薬手帳の利用促進が図られてきた。しかし一方で、一般用医薬品と医療用医薬品との相互作用においては、未だにお薬手帳を十分活かしてきれていない可能性があり臨床的に危険な問題が生じることも分かった。今後は一般用医薬品と医療用医薬品の相互作用による問題を防ぐためにも、お薬手帳の活用をより一層推進する必要があると考えられた。そして、今まで以上に医薬品適正使用を図ることが重要であると考えられた。

#### 【キーワード】

一般用医薬品 医療用医薬品 医薬品相互作用 お薬手帳 医薬品適正使用

## P-2 ①OTC 医薬品関連

### 一般用医薬品と医療用医薬品の相互作用に関する研究Ⅱ ～添付文書を中心とした一考察～

足立 茂<sup>1)</sup>、三村 千尋<sup>1)</sup>、渡邊 大輔<sup>2)</sup>、宮沢 伸介<sup>1)</sup>

1) 明治薬科大学地域医療コース 2) 薬樹株式会社薬局元町

【目的】一般用医薬品（OTC 薬）の販売における規制緩和や平成 25 年 1 月の最高裁判所によるインターネット通販の一律禁止無効判決により、消費者が OTC 薬をより一層購入しやすい状況になっているため、処方箋に基づく医療用医薬品（処方薬）により治療を受けている患者がさらに OTC 薬も服用する可能性がある。一般消費者が OTC 薬と処方薬の各成分による相互作用を回避するには OTC 薬添付文書の利用が不可欠であるので、それがどのように利用されているかを調査し検討を加えた。

【方法】アンケート調査は平成 24 年 2 月 4 日～9 日に実施し、当該薬局に処方箋を持参した患者に対して、待合室にいる間にアンケート用紙を配布し投薬時に回収する配布形式で実施した。調査項目は OTC 薬添付文書の閲覧有無、処方薬服用中における OTC 薬服用の有無及びそれぞれの種別、OTC 薬と処方薬併用時の不安感の有無などとした。アンケート用紙を回収後、OTC 薬と処方薬の違いをまとめたリーフレットを配布した。

【結果・考察】回答を得た 96 名のうち、88 名は OTC 薬添付文書を読んでいた。実際に読む項目は、用法・用量が 84%、効能・効果が 68%であったのに対し、他の医薬品や食品との飲み合わせに至っては 40%であった。処方薬服用中に OTC 薬服用経験者が 96 名中 21 名見つかった。このうち 10 名が飲み合わせに対して不安や疑問があったと回答し、6 名は医療者に相談していたが、4 名は個人が判断していた。これに対して不安や疑問を抱かなかった 11 名の中に、70 代男性 1 名に前立腺肥大症治療薬と総合感冒薬、40 代男性 1 名に抗アレルギー薬と総合感冒薬を併用しているケースがあった。前者では排尿困難、後者では重複成分による作用増強が知られている。また、その 21 名中 12 名はかかりつけ薬局に併用のことを伝えていなかった。

【結語】OTC 薬添付文書の相互作用に対する関心は低く、併用しても個人判断している度合いが高い傾向にあるため、併用時の危険性を減らす方策として OTC 薬添付文書の活用の啓発や、リーフレット配布による注意喚起は有効な対策になると考えた。

【キーワード】OTC 薬、処方薬、相互作用、OTC 薬添付文書、リーフレット

## P-3 ①OTC 医薬品関連

### OTC 医薬品の添付文書に対する一般人の意識調査

城西国際大学薬学部 佐藤 香、小嶋文良、懸川友人

#### 【目的】

一般用医薬品(OTC 医薬品)は適正に使用することにより、セルフメディケーションの推進、医療費削減に繋がる。しかし、不適切な選択や間違った使用をしてしまうと、症状の悪化等、更なる健康被害すらも起こしかねない。添付文書には、使用上の注意、効能・効果、用法・用量、副作用などの大切な情報が記載されており、添付文書を理解した上で使用することが最善のセルフメディケーションになると考えられる。そこで今回一般の方を対象に、OTC 医薬品の[添付文書]に関するアンケート調査を行った。

#### 【方法】

平成24年9月25日から10月15日までの期間、一般向けアンケート調査を行った。アンケート内容は性別、年齢、OTC 医薬品の使用経験の有無、OTC 医薬品の添付文書存在の認知、添付文書利用の有無、OTC 医薬品の適正使用の有無、OTC 医薬品による健康被害・悪化経験の有無などで、選択方式、自由記述方式により回答を得た。

#### 【結果】

回答者総数102名(男性26名、女性73名)、平均年齢63.1歳(男性68.5歳、女性61.2歳)であった。87.3%がOTC 医薬品の使用経験があると回答し、添付文書のことを知っていると回答した方が89.2%であった。また、添付文書を知っていたと回答したうちの75.5%が読んでからOTC 医薬品を使用しているとの回答であった。添付文書を読んでからOTC 医薬品を使用している方のうち、添付文書があつてよかったとの回答が94.7%、あつてもなくても変わらないとの回答が5.3%、必要ないは0%であった。OTC 医薬品を使用して具合が悪くなったり、不具合生じたとの回答も認められた。

#### 【考察】

今回の調査で、ほとんどの方がOTC 医薬品の添付文書をしていたが、使用経験はあるが添付文書を知らないという方もいることが判明した。購入時に薬剤師が一言添える工夫や外箱にもっと分かり易く添付文書について記載する必要があると考える。また、添付文書を使用しないでOTC 医薬品を使用している方もいたが、その多くは薬剤師による説明を受けている方ばかりで、薬剤師による適切な説明もセルフメディケーションの推進につながるということが判明した。またOTC 医薬品で副作用を経験したとの回答や、中には「薬剤師がいるのに説明してくれない」という意見もあり、使用する側の医薬品に関する関心度・理解度の問題だけでなく、薬剤師自身がより積極的にOTC 医薬品や医薬品についての情報を提供することがセルフメディケーションには不可欠であると考えられる。

#### 【キーワード】

OTC 医薬品、適正使用、添付文書

## P-4 ①OTC 医薬品関連

### レギュラトリーサイエンス研究—スイッチ OTC 薬に係る意識調査—

○渡邊 亮<sup>1)</sup>、濱 良一<sup>2)</sup>、藤浦大介<sup>2)</sup>、小野俊介<sup>3)</sup>、児玉庸夫<sup>1)</sup>

1) 城西国際大学薬学部、 2) 飯塚薬剤師会、  
3) 東京大学大学院薬学研究科

【目的・背景】国民のセルフケア意識の高まりから、自身で選択できる OTC 薬の範囲（種類）に対する要望も変化している。厚労省は平成 19 年度より日本薬学会に委託してスイッチ OTC 薬候補となる医療用成分を選定しているが、地域薬剤師が考えるスイッチ OTC 薬候補成分に係る情報は十分でない。今回、地域薬剤師会を対象に、スイッチ OTC 薬の範囲拡大や候補成分に係る調査を行った。

【方法】福岡県飯塚薬剤師会（会員数：199）による医療保険伝達講習会（2012. 11. 1）への参加薬剤師を対象に、スイッチ OTC 薬に係るアンケート調査を行った。また、回答されたスイッチ OTC 薬候補成分について、厚労省が示す要件への適合性を評価した。

【結果】参加薬剤師は 72 名で、うち 70 名がアンケートに回答した。勤務先は、薬局（調剤のみ）42 名（60%）、薬局（調剤+OTC 薬販売）26 名（37%）、店舗販売業 0 名、その他（製薬企業）2 名（3%）であった。勤務年数は 11 年以上が 53 名と 76%を占めた。スイッチ OTC 薬の拡大については、「必要」36 名（51%）、「必要でない」30 名（43%）、回答なし 4 名（6%）であり、「必要」の理由は「医療費削減に一定の効果がある」が最も多く、一方、「必要でない」の理由は「スイッチ OTC 薬を拡大すると、購入者に対する安全性上の問題が発生する」が最も多かった。業態別の集計では、薬局（調剤のみ）で「必要」20 名（48%）、「必要でない」20 名（48%）、回答なし 2 名（4%）、薬局（調剤+OTC 薬販売）で「必要」14 名（54%）、「必要でない」10 名（38%）、回答なし 2 名（8%）であった。スイッチ OTC 薬候補として、18 成分および 7 つの薬効領域（抗生物質等）が挙げられ、厚労省が示す要件へ適合する成分が存在した。

【考察】厚労省、日本薬学会、日本 OTC 医薬品協会、日本薬剤師会ではセルフメディケーション推進の観点から、スイッチ OTC 薬の開発を推奨しているが、今回のアンケート結果では、スイッチ OTC 薬の拡大については、「必要」が「必要でない」をわずかに上回る結果となり、スイッチ OTC 薬の拡大により購入者に対する安全性上の問題が発生するとの懸念等が背景にあることが示唆された。

【結語】今後は他地区薬剤師会を対象にアンケート調査を行い、再現性を確認したい。

【キーワード】スイッチ OTC 薬、地域薬剤師、医療費削減、安全性

## P-5 ①OTC 医薬品関連

### ブランド認知と価格が OTC 医薬品選択に与える影響-大学生における検討

○堂園るり子<sup>1)</sup>、泉澤恵<sup>2)</sup>、日比野治雄<sup>1)</sup>、小山慎一<sup>1)</sup>

1) 千葉大学大学院工学研究科デザイン心理学研究室、2) 日本大学薬学部

【目的】筆者らが大学生 66 名を対象に行った質問紙調査ではナショナルブランド（以下 NB）の一般用医薬品（風邪薬・胃腸薬・湿布薬・ビタミン剤）および NB と同一成分・効能・効果で価格が半額のプライベートブランド（以下 PB）医薬品が販売されている場合に、風邪薬と胃腸薬では NB が好まれ、湿布薬とビタミン剤では PB が好まれた（呂ら 2012, 第 10 回セルフメディケーション学会）。消費者が比較的风险が高いと認識している風邪薬と胃腸薬で NB が好まれる一方で比較的风险が低いと認識している湿布薬とビタミン剤では PB が好まれるという結果はブランドがリスクマネジメントにおいて重要な役割を演じていることを示唆している。本研究では PB の価格をより実状に近い NB の 2 割引きに設定した上で大学生における OTC 医薬品の選択について調査するとともに、ブランド認知に関する調査を行った。

【方法】10～20 代の日本人大学生 78 名を対象に、インターネットアンケート調査を行った。参加者は NB・PB の定義を理解していることを確認後、設問に回答した。設問では NB の医薬品（風邪薬・胃腸薬・湿布薬・ビタミン剤）および NB の医薬品と同一成分・効能・効果で価格が 2 割安価な PB 医薬品が販売されている場合に、どちらを選択するかについて回答した。さらに、「品質」「効果」「安全性」「価格の適正さ」「パッケージデザイン」「副作用のリスク」において NB・PB のどちらが優れていると思うかについて回答を行った。

【結果】風邪薬・胃腸薬・ビタミン剤では NB を選択する回答が多かったが（それぞれ 72%, 70%, 64%,  $p < .05$ ）、湿布薬では PB を選ぶ回答の方が多かった（60%,  $p < .05$ ）。また、「品質」「効果」「安全性」「パッケージデザイン」「副作用のリスク」においては、NB の方が優れているという回答の割合が有意に多く（それぞれ 74%, 62%, 67%, 41%, 42%,  $p < .01$ ）、「価格」においては PB の方が適正であるという回答の割合（50%）が有意に多かった（ $p < .01$ ）。

【考察】PB の価格が NB の半額の場合はビタミン剤では PB が好まれたが、NB の 2 割安価の場合、ビタミン剤でも NB が好まれた。消費者はブランドでリスクをコントロールしつつ価格も考慮して一般用医薬品を選択しているが、リスクが高いと認識している医薬品ほどブランドへの依存度が高く、価格の影響を受けにくいと考えられる。

【キーワード】OTC 医薬品, リスクマネジメント, ナショナルブランド, プライベートブランド

## P-6 ①OTC 医薬品関連

### 一般用医薬品および医療用医薬品の製剤学的特性の評価研究 I フェルビナク含有貼付剤

高岡幸恵、○和田侑子、円入智子、高田智生、菅野敦之、山崎紀子、下川健一、石井文由  
明治薬科大学 セルフメディケーション学教室

【目的】フェルビナク含有貼付剤は、医療用先発医薬品であるセルタッチの他、ジェネリック医薬品も多数上市されており、また一般用の OTC 薬も多数販売されている。本剤は、筋肉痛や関節痛等の痛みを軽減する為に用いられ、短期的にも、長期的にも使用される。スイッチ OTC 薬は、医療用医薬品と同等の主薬配合量を持ち、同等の効能効果が期待できる上、急性期に短期的に痛みを和らげる為に、いつでもどここの薬局でも購入できるという利点は大きい。また長期的使用の場合にも、繰り返し同じ薬を貰う為に定期的に医療機関を受診する手間を省くことができる。また、大きな社会問題となっている医療費高騰の抑制にも有効である。地域の薬局が、適切な一般用医薬品の提供と指導を行う為には、医療用医薬品と一般用医薬品を製剤学的に比較評価した情報が必要であると考えられる。そこで本研究では、フェルビナク含有貼付剤の医療用医薬品のうち先発品、後発品 2 種、および一般用医薬品（以下 OTC と略す）8 社 10 種の製剤学的特性を調査して比較評価を行い、薬剤師が薬剤を製剤学的視点から選択し、患者ならびに生活者に提供できる情報とすることを目的とした。

【方法】各製剤に関して以下に示す測定を行った。

- 1) 各製剤の一定面積を切り取り精製水に浸し、振とう後の溶液の pH を測定した。
- 2) エチレン・酢酸ビニル共重合体に裁断した各製剤を貼り付け、各製剤を秒速 1mm で引き剥し、その時の最大剥離力をデジタルフォースゲージで測定した。
- 3) 20ml の三角フラスコ（口径 2cm）に 10ml の精製水を入れ、直径 40mm の円形に裁断した製剤で開口部を覆い重量を測定した。温度 40℃、湿度 75% の条件下に 24 時間静置し、放冷後に重量を測定して、水分蒸発量および透湿度を算出した。
- 4) 各製剤を幅 20mm、長さ 100mm の長方形に裁断し、一辺（20mm 側）を実験台に固定し、反対側を引っ張ることにより、最大の伸張を測定した。
- 5) 各製剤を幅 50mm、長さ 50mm の正方形に裁断し、半分の面積を実験台の端に貼り付け、残り半分が折れ曲がる角度を測定し、支持体の柔軟性として評価した。

【結果】各製剤の製剤学的特性、とくに透湿度、のび、粘着力に差があることが明らかとなった。これらの特性は患者使用感に影響を及ぼし、透過湿度に関しては総じてムレにくいほうが良いが、のびおよび粘着力に関しては人それぞれの好みにより優劣が異なる。患者のより良い服薬アドヒアランスを得るためには、薬剤師が本研究結果から明らかとなったこれらの特性を踏まえ、患者一人一人に適切な製剤あるいは治療法を選択を行なうことが必要だと考えられた。

[ キーワード ] OTC 比較 製剤特性 フェルビナク 貼付剤



## P-7 ①OTC 医薬品関連

### 一般用医薬品および医療用医薬品の製剤学的特性の評価研究 II フマル酸ケトチフェン含有点鼻薬

阿美翔子、○円入智子、和田侑子、高田智生、山崎紀子、下川健一、石井文由  
明治薬科大学 セルフメディケーション学教室

【目的】フマル酸ケトチフェン含有点鼻薬は、アレルギー性の鼻炎に用いられ、とくに花粉症の患者の使用率が高い。現在では、スイッチ OTC 薬と呼ばれる医療用医薬品と同じ成分を配合した一般用医薬品の数も急速に増加し、花粉症も軽度の症状であれば、適切な一般用医薬品の利用によって、治療や健康管理が可能となっている。大きな社会問題となっている医療費高騰を抑制するためにも、セルフメディケーションの推進は不可欠であり、これは地域の薬剤師あるいは登録販売者および薬局が担うべき役割である。しかし、医療用医薬品を用いる治療と一般用医薬品を用いる治療を、どのように選択すべきか判断する為の基準が明らかにされていない現状がある。

そこで本研究では、フマル酸ケトチフェン含有点鼻薬を例にとり、医療用医薬品のうち先発品、後発品 3 種、および一般用医薬品（以下 OTC 薬と略す）6 社 9 種の製剤学的特性における比較評価を行い、薬剤師が薬剤を製剤学的視点から選択し患者ならびに生活者に提供できる情報としてまとめることを目的とした。

【方法】フマル酸ケトチフェン含有点鼻薬の医療用医薬品（先発品 1 種、後発品 3 種）および OTC 薬 9 種について、添付文書による成分組成の調査、物性値として pH、凝固点降下方による浸透圧、表面張力、一回噴霧量、使用後の残液量、噴霧液の広がり角度、粘度および噴霧に要する指の力を測定した。表面張力は、デュヌイ表面張力計による円環法で、25℃に設定した室内で測定した。一回噴霧量は常温で噴霧した量を測定した。粘度は TPE-100 形粘度計を用い、20℃、25℃および 35℃の条件で測定した。噴霧に要する指の力はデジタルフォースゲージを用いて測定した。

【結果】各測定結果より、各医薬品の製剤学的特性に差があることが明らかとなった。とくに、噴霧に要する指圧力や、粘度に大きな差が観察された。各薬剤の主薬濃度は全て同等であるので、効果効能は同等であると予測されるが、容器形状などの製剤学的特性の差は、患者主観的な使用感に大きく影響を与えることが予想される。噴霧に要する力が大きいものは、内液の粘度が高い傾向にあり、高粘性の利点である鼻腔内での留まりやすさと、軽い力が出るという利点は、相反しており、患者ひとりひとりの好みにより選択すべきであると考えられる。本結果を参考に、薬剤師あるいは登録販売者が、個々の患者に適正な薬剤の選択をすることが重要であると推察された。

[ キーワード ] OTC 比較 製剤特性 フマル酸ケトチフェン 点鼻薬

## P-8 ①OTC 医薬品関連

### 一般用医薬品および医療用医薬品の製剤学的特性の評価研究 III クロムグリク酸ナトリウム含有点眼剤

進藤真理子、○小泉茉莉江、円入智子、和田侑子、高田智生、下川健一、石井文由  
明治薬科大学 セルフメディケーション学教室

【目的】クロムグリク酸ナトリウムは、アレルギー性の眼炎に用いられ、とくに花粉症の患者の使用率が高い。現在では、スイッチ OTC 薬と呼ばれる医療用医薬品と同じ成分を配合した一般用医薬品の数も急速に増加し、花粉症も軽度の症状であれば、適切な一般用医薬品の利用によって、治療や健康管理が可能となっている。大きな社会問題となっている医療費高騰を抑制するためにも、セルフメディケーションの推進は不可欠であり、これは地域の薬剤師あるいは登録販売者および薬局が担うべき役割である。患者の健康相談に応需し、適時の受診勧告を含め、適切な一般用医薬品の提供と指導を行うには、高度の知識および技能に加え、医療用医薬品と一般用医薬品を製剤学的に比較評価した情報が必要であると考えられる。

そこで本研究では、クロムグリク酸ナトリウム含有点眼剤の医療用医薬品のうち先発品、後発品 2 種、および一般用医薬品（以下 OTC 薬と略す）17 社 21 種の製剤学的特性を比較評価することで、薬剤師が薬剤を製剤学的視点から選択し患者ならびに生活者に提供できる情報としてまとめる。

【方法】各医薬品について、添付文書による成分組成の調査、物性値として pH、浸透圧比、表面張力、一滴量、粘度および一滴滴下に要する指の力を測定した。表面張力は、デュヌイ表面張力計による円環法で 25℃に設定した室内で測定した。一滴量は 25℃の室内で滴下した 1 滴の重さを測定した。粘度は TPE-100 形粘度計、滴下に要する指の力はデジタルフォースゲージを用いて測定した。

【結果】各測定結果より、医療用医薬品の後発品と先発品、また各種 OTC 薬とで、異なる製剤学的特性を有していることが明らかとなった。浸透圧比が 1 を大幅に下回る製剤もあり、点眼時の眼表面への影響が予想された。また、特殊な容器を用い防腐剤フリーを特徴としている製剤があり、滴下に要する力が非常に大きく、患者は使用しづらい事が予想されるが、眼への安全性を考慮された剤形であると考えられた。これらの結果のように、品質や、患者使用感における特徴、患者へのメリットデメリットを理解した上で、ひとりひとりの患者のニーズに合わせた治療法や薬剤の選択を行うことで、セルフメディケーション支援が可能になると考えられる。

【キーワード】 OTC 比較 製剤特性 クロムグリク酸ナトリウム 点眼剤

## P-9 ①OTC 医薬品関連

### かぜ症候群初期における医療用の去痰薬を配合した スイッチ OTC 感冒薬の服用がもたらす付加的効果の検討

○玉城 武範<sup>1) 2)</sup>、有海 秀人<sup>1)</sup>、吉山 友二<sup>1)</sup>

1) 北里大学薬学部 臨床薬学研究・教育センター臨床薬学（保険薬局学）

2) ミドリ薬局美里店

#### 【目的】

医療用医薬品のアンブロキシソール塩酸やカルボシステインは、去痰薬に分類されているが、本来の喀痰調整作用以外にウイルス感染抑制作用、抗酸化作用、抗炎症作用を有していることが報告されている。そこで、私たちはアンブロキシソールやカルボシステイン含有 OTC 感冒薬が、付加的価値として抗インフルエンザ作用を併せ持つ可能性があるか検討した。

#### 【方法・対象】

ヒト A 型インフルエンザウイルス (N1H1) を MDCK (イヌ腎臓) 細胞に接種し、37°C、1 時間細胞に感染させた。感染後ウイルスを除去し、アンブロキシソール塩酸やカルボシステイン存在下で 72 時間培養を行い、細胞から培養上清中に放出された N1H1 量をニワトリ赤血球の凝集反応 (HA 反応) を指標に N1H1 増殖に対する去痰薬の効果を検討した。

#### 【結果】

MDCK 細胞を用いて N1H1 ウイルス産生に対するアンブロキシソール塩酸 (16 $\mu$ M~250 $\mu$ M) とカルボシステイン (16  $\mu$ M~250  $\mu$ M) の効果を検討した結果、アンブロキシソール (250  $\mu$ M)、カルボシステイン (250  $\mu$ M) を添加すると、未添加群の HA 価 32 倍に比べ、16 倍に凝集が抑制された。すなわち、アンブロキシソール塩酸とカルボシステインは、N1H1 感染後のウイルス増殖に対して一定の効果があった。

#### 【考察】

昨年の本学会の一般演題で、私たちは医療用医薬品のアンブロキシソール塩酸塩錠の処方量が増加していることや、日常診療において処方医からの抗インフルエンザ作用を期待した去痰薬の使用について、特に問題点が抽出されないことを報告した。すなわち、実地医療で安心して抗インフルエンザ効果を期待してアンブロキシソール製剤が選択できる可能性が示唆された。今回の基礎研究の成績はアンブロキシソールやカルボシステイン含有 OTC 感冒薬が、インフルエンザ感染症を中心とした気道全域におけるかぜ症状の予防に役割を果たす可能性のある薬剤と考えられ、まさにセルフメディケーション推進に合致した研究成果である。

#### 【キーワード】

OTC 薬、抗インフルエンザ作用、去痰薬

## P-10 ③他の健康療法関連

### OTC 医薬品の添付文書の問題点 —トラネキサム酸含有医薬品を例として—

○蓮見寛人<sup>1)</sup>、湯田康勝<sup>1)</sup>、江口亜希子<sup>2)</sup>、齋藤充生<sup>2)</sup>、大室弘美<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup>武蔵野大学・薬学部、<sup>2)</sup>帝京平成大学・薬学部

【目的】OTC医薬品の添付文書は適正使用に必要な情報を需要者に提供するために作成されており、需要者が容易にかつ適切に理解可能な記載が必要である。本研究の目的は、添付文書の記載を検討しOTC医薬品の適正使用に資することである。今回はトラネキサム酸含有医薬品を事例として、調査・検討した。

【方法】(独) 医薬品医療機器総合機構よりトラネキサム酸含有医薬品の添付文書を入手し、そのうち1日用量が医療用と同じものの添付文書の記載内容を調査・検討した。

【結果と考察】トラネキサム酸 1日用量 750mg (医療用医薬品の最低用量) の OTC 医薬品 12品目〔第一類、第二類 (総合感冒薬) 及び第三類医薬品 (口腔・咽頭薬)〕の添付文書の記載内容を検討した結果の主なものを以下に示す。

(1) トラネキサム酸に関連する事項 : 「相談すること」には、医療用医薬品で「慎重投与」とされている「血栓症のある人 (脳血栓、心筋梗塞、血栓性静脈炎、肺塞栓症等)」と同様の記載があった。一方、「血栓症が現れるおそれのある人」の記載はあったが、「以前に血栓症にかかったことがある人」等の具体的記載は第一類医薬品のみであった。需要者の理解のために具体的な記載が必要と考える。

(2) 一般的な事項 : 1) 総合感冒薬の「効能・効果」である「風邪の諸症状の緩和」の「諸症状 (11種)」の記載順は配合成分がほぼ同じでも異なる例があり、需要者の混乱を招くと考えられた。口腔・咽頭薬も同様であった。2) 使用期間の記載 (第一類を除く) は、①5日を越えて服用しない旨、又は②長期連用しない旨であった。②には、5~6回服用、又は5~6日服用しても症状が良くならない場合は相談することの記載があったが、いずれの場合も需要者が自己判断で規定を超えた期間の使用が可能である。このため、「長期連用しない」にかえた具体的な記載が必要である。3) 「相談すること」に記載されている「高齢者」は具体的な年齢がなく、需要者の判断に任されている。4) 「保管及び取扱い上の注意」では、使用期限を過ぎた製剤や PTP 包装の取扱いに関する記載がない事例があった。一方、開封後の取扱いについても記載のある事例は、需要者自身による医薬品の品質管理の一助となると考えられた。

【結語】OTC 医薬品の添付文書の記載について調査・検討した結果、一部に需要者が理解しにくい記載や情報提供が不十分な事例が見られた。需要者に志向した改善が望まれる。

【キーワード】OTC 医薬品 添付文書 需要者志向

## P-11 ③他の健康療法関連

### ピラティストレーニングによる高齢者の身体的健康増進および筋力強化効果

○和田佳子、木原麻紀、菊池桃香、円入智子、和田侑子、高田智生、下川健一、石井文由  
明治薬科大学 セルフメディケーション学教室

〔目的〕 高齢者は、老化によって筋肉・関節が衰えて足腰に負担がかかりやすくなり、疲労や痛みが問題になる上、動的機能が制限される。この結果、通常の生活に支障をきたすだけでなく、転倒の危険性が高まる。平成22年の厚生労働省「国民生活基礎調査」によると、高齢者が要支援になる原因として、1位：脳血管疾患(脳卒中)に次いで2位の関節疾患・転倒・骨折が大きな割合を占めている。高齢者が寝たきりにならずに、QOLの高い生活を送るためには、身体機能を極力低下させない事が大切である。さらに、高齢者の健康寿命の延長は、少子高齢化し介護医療費が高騰する社会にとっても、最重要課題である。

怪我のリハビリを目的に、身体に負担をかけずに筋力強化を行えるよう機能解剖学に基づいて開発されたピラティストレーニングは、身体的機能が低下しはじめる高齢者の健康増進や筋力強化に貢献できる可能性を秘めている。実際にオーストラリアで行われた無作為化試験では、ピラティストレーニングを行った60歳以上の高齢者に、動的および静的なバランスの改善の傾向が見られたという結果が得られている。しかし実施期間が短かった為に有意差のある効果は証明できておらず、ピラティストレーニングが、身体機能にどのように影響をもたらすかについては未だ明確にされていない。そこで我々は、我国の高齢者に対するピラティストレーニングの身体的機能改善効果を調査検証した上で、高齢者が長く健康に生活できる方法を確認し、健康寿命の延長に貢献することを目的とする。

〔方法〕 50歳以上の健常な男女からモニターを募集し、ピラティストレーニングを12週間実施した。対象者の希望により、週3回1時間のトレーナーによる指導を受ける方法か、毎日30分自宅でトレーナーの指導風景を撮影したDVDを鑑賞しながらトレーニングを行う方法のどちらかを選択した。その結果、47名のモニターがスタジオにてグループレッスンに参加し、16名のモニターは毎日自宅でのDVDトレーニングを希望した。トレーニングの開始前、開始6週間後および12週間後に、体組成計による身長、体重、BMI、全身の筋肉量・筋肉率、両腕および両足の筋肉量・筋肉率の測定を行った。また、長座体前屈、開眼片足立ちテスト、椅子立ち座りテスト、最大一步幅、ボディバランスの測定を行った。なお、本研究への参加を希望する対象者には、文書を用いて研究内容の説明を行い、同意書による研究参加への承諾を得た

〔結果〕 本研究の結果より、BMI、体脂肪率に有意な改善(減少)が見られ、また、長座体前屈、最大一步幅、30秒椅子立ち上がりテストに有意な改善(増大)が見られた。ピラティスエクササイズは、低下した高齢者の身体機能を向上させ、痛みや障害を軽減するとともに寝たきりになりにくい身体をつくることで、健康寿命を延ばすことに貢献できる可能性が示唆された。

[ キーワード ] 高齢者 ピラティス 筋力 転倒予防 **BMI** 体脂肪

## P-12 ④健康管理関連

### Jリーグジュニアユースを対象とした食生活の現状に及ぼす支援の影響

柴田麗<sup>1)</sup>、御牧真代<sup>2)</sup>、太田篤胤<sup>2)</sup>、酒井健介<sup>2)</sup>、杉浦克己<sup>3)</sup>

1) (株) 明治、2) 城西国際大学、3) 立教大学

【目的】Jリーグに属するクラブは、トップチームから下部組織に至るまで、一貫した理念に基づく指導を実施している。スポーツ選手にとっての食事の重要性の認知が広がり、Jのようなクラブではライフステージに応じた一貫した栄養支援の実施が可能となる。本研究ではジュニアユース（中学生）選手を対象に、食事・栄養に関する専門家の存在や支援活動を実施することが選手の食行動や栄養摂取状況に与える影響について検討し、育成期サッカー選手における食教育や栄養支援の有用性について検討した。

【方法】Jリーグに属する全ジュニアユース選手 2005 名を対象に、食生活調査を実施した。調査内容は3日間食事記録(目安量法)に基づく食事調査と適切な食生活に関する行動変容段階、意思決定のバランス尺度、自己効力感尺度、行動的スキル尺度、ソーシャルサポート尺度とした。併せてチーム関係者に食事や栄養に関するチームの取組み状況について聞き取り調査を行った。本研究は(株) 明治の倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】解析対象者は全ての調査項目に回答した 1472 名 (73.4%) であり、チームに食事や栄養の専門家(支援者)がいる選手は 478 名 (32.5%)、最近1年間で食事・栄養に関する支援を受けた経験のある選手は 1102 名 (74.9%) であった。なお支援者のいる選手は全て、栄養支援を受けていた。支援者の存在や栄養支援の実施は、いずれも対象者の行動変容段階の分布に有意な影響を及ぼし後期段階の割合が増加した。支援者の存在は、自己効力感、ソーシャルサポート、行動的スキルに有意な影響を及ぼし、いずれも高値を示した。支援活動の実施はソーシャルサポートに影響を及ぼした。栄養素等摂取状況では、支援活動の実施は食事量を増加させた結果、エネルギーおよび各栄養素摂取量が増加し、支援者の存在は摂取エネルギー量の増加は認められなかったが、栄養素密度の高い食事の摂取を可能とすることが示唆された。

【考察】Jリーグクラブのようなプロスポーツ環境では、トップ選手の食事や栄養に関する支援のみならず、下部組織における選手育成の一環としても食事や栄養に関する専門家を配置することが望ましいことが示唆された。また人的支援が不可能な場合であっても、外部の組織を利用するなどして食教育や栄養支援を計画的に実践していくことが望ましいと考えられる。今後は、クラブにおけるライフステージに応じた一貫した栄養支援の実施を検討していきたいと考える。



## P-13 ④健康管理関連

### 慶應義塾大学薬学部における健康づくり教室と継続的参加要因に関する研究

○藤城弘子<sup>1)</sup>、川合由起<sup>1)</sup>、岸本桂子<sup>1)</sup>、佐藤典子<sup>2)</sup>、板垣悦子<sup>3)</sup>、福島紀子<sup>1)</sup>

1) 慶應義塾大学薬学部社会薬学講座 2) 慶應義塾大学薬学部

3) 慶應義塾大学体育研究所

【目的】本邦において生活習慣病患者は増加する一方であり、課題として運動習慣者の増加が挙げられている。運動習慣者を増加させるための取り組みの1つとして様々な運動教室が開催されているが、継続的参加を維持することの困難さなどが報告されている。本学では、港区在住・在勤者に対し運動習慣の形成を目的に、平成15年度より健康づくり教室を継続的に開催しており、長期に渡って受講する参加者が複数存在している。継続的参加要因及び薬系大学が実施する影響を明らかにするため、当教室の参加者を対象に調査を行った。

【方法】当教室は本学体育館にて、1回2時間で年10回開催している。13種の体力・健康測定を行った後に、全員でストレッチ、有酸素運動を行い、その後、卓球・タオルストレッチ等の5～6種類の難易度の異なった選択式メニューに分かれて運動する。また、本学の自由単位となっており、学生スタッフが複数人参加している。平成25年度参加者のうち、今回が初参加ではない者を対象とし、7月19日、8月23日の教室開催中に半構造化インタビューを行った。当教室への継続的参加要因を抽出後、コードを付与しカテゴリー化した上で分析、考察を行った。

【結果】50～80代の男性6名、女性10名の計16名から回答を得た。聴取内容から抽出された継続的参加要因は10個の『カテゴリー』と25個の[コード]に分類された。その中で回答者全員が『プログラム』のカテゴリーを挙げ、コードは[難易度][自宅で続けられる運動][豊富なメニュー]等であった。『スタッフ』の中には[学生の存在]があった。他のカテゴリーは、『運営』『運動に対する思い』『測定』『場の環境』『他者とのコミュニケーション』等があった。

【考察】多くのコードが抽出され、当教室の様々な側面が継続参加に繋がっている可能性が示唆された。『プログラム』は全員が挙げており、難易度の違ったメニューの中から選べる形式が継続参加に寄与していると考えられた。この選択形式は、学生スタッフの参加により可能となっているが、薬学生は、健康支援について実践を交えて学んでいる。聴取内容からも学生スタッフの存在は抽出され、一つの継続的参加要因となっていると考えられる。以上のことから、薬系大学が健康支援に関わることは、参加者、学生双方にメリットがあり、教育施設として、地域の健康拠点としての両面から影響を及ぼす可能性が示唆された。

【キーワード】健康づくり、運動教室、継続的参加要因、インタビュー調査

## P-14 ⑤クスリ教育関連

### OTC 漢方薬の適正使用について

○高際麻奈未<sup>1)</sup>、緒方千秋<sup>1)</sup>、花輪壽彦<sup>2)</sup>

1) 北里大学東洋医学総合研究所 薬剤部、2) 北里大学東洋医学総合研究所漢方診療部

【目的】近年、高齢化が進み医療費の増大が深刻な問題になっていることに加え、生活習慣病などが増加していることからセルフメディケーションが推進されてきている。マスメディアによる漢方薬や生薬を配合した製剤の広告も多く見受けられるようになり、健康に対する意識の高い生活者がこれらを使用する機会も増えている。本来、漢方薬は証に合わせて処方されるものであるが、OTC 薬は生活者が自ら使用するものであるため、実際に服用したあとで不都合な症状が起きる場合もある。そこで生活者が安心して OTC 薬の漢方薬・生薬製剤を使用するための情報提供に必要な知識をまとめ、セルフメディケーションの推進に役立たせたい。

【方法】財団法人日本公定書協会が監修する『改訂 一般用漢方処方の手引き』とその追補版および JSM-DB セルフメディケーション・データベースのおくすり検索サイトを用いて OTC 薬の漢方薬・生薬製剤について調査を行った。

【結果】改訂新基準収載処方のうち不都合な症状が現れやすく、特に使用上の注意が必要であると考えられる生薬を含む処方以下の通りであった。カンゾウ 166 処方、ダイオウ 28 処方、ブシ 7 処方、マオウ 16 処方、オウゴン 42 処方、サンシシ 16 処方。

【考察】OTC 薬の漢方薬・生薬。。。。製剤の場合は減量処方にされているものもあるが、生活者によってはカンゾウでむくみや血圧上昇など、ダイオウで下痢など、ブシで動悸や痺れなど、マオウで胃もたれ、尿閉、不眠などの症状が起こることがある。またオウゴンでは間質性肺炎、サンシシでは腸間膜静脈硬化症などが起こるといった報告がある。生活者によく使用されている防風通聖散、八味地黄丸、防己黄耆湯、小青竜湯などはこのような生薬を含むため、使用には注意が必要であると考えられた。

【結語】OTC 薬の漢方薬・生薬製剤は第 2 類医薬品に分類されており、薬剤師や登録販売者から生活者への情報提供は努力義務となっている。そのため、薬剤師や登録販売者は生活者から漢方薬についての質問や相談を受けた場合に適切で理解しやすい情報提供が出来るように知識を身につけておく必要がある。また、漢方薬は副作用が少ないという印象をもつ生活者もいるが、適正に使用しないと不都合な症状が起こることを理解してもらうことが大切である。これらの実践がセルフメディケーションの推進にも繋がると考えられた。

【キーワード】漢方薬・生薬製剤、OTC 薬、セルフメディケーション

## P-15 ⑤クスリ教育関連

### 国際学術交流におけるセルフメディケーション研修の成果

○有海 秀人<sup>1)</sup> 川上美好<sup>1)</sup>、吉山 友二<sup>1)</sup>

1) 北里大学薬学部 臨床薬学研究・教育センター臨床薬学（保険薬局学）

#### 【目的】

全世界に通用し、かつ臨床現場の問題点を解決できる薬剤師教育、すなわち国際的な視野に立つ先駆的な薬剤師の育成が求められている。そこで、北里大学薬学部（以下、本学部）は、医療薬学の先進国である米国、特にその先進地域であるアイオワ州立アイオワ大学薬学部での研修を通じて、本学部学生が臨床薬学やセルフメディケーションを専門とする職業人としての国際化を目指すことを目的に本研修を企画した。

#### 【方法】

2週間の日程で、本学部6年生8名でアイオワ大学臨床薬学研修を行った。本研修の内容は、アイオワ大学内で行われている薬物治療学をはじめ米国医療制度や臨床薬学研究などの講義、およびアイオワ大学病院および、アイオワシティ近郊のOTCを備えている保険薬局の施設見学であった。また、本研修に先駆けて、アイオワ大学薬学部副薬学部長（当時）である Sorofman 教授を招聘し、臨床薬学研修に関するオリエンテーションおよび事前講義を行った。

#### 【結果・考察】

アイオワ大学薬学部の受け入れ体制および研修スケジュールは万全であり、研修は順調に進行することができた。施設見学や講義を通じて、米国の薬剤師に対する信頼度が非常に高く、ワルファリン専門外来や高血圧、2型糖尿病、脂質異常症外来が存在して、積極的に専門的な薬物治療に携わっていることに加えて、セルフメディケーション支援に重要な役割を果たしていた。また、地域の中での医療保険薬局の中では、糖尿病患者用シューズや介護用品の販売、そして予防接種を行うなど、地域医療の中核を担っていた。このように、米国の薬剤師は調剤業務や服薬指導だけでなく、専門的な薬学知識を存分に発揮できる環境が整っていた。

#### 【結論】

日米の医療制度等に違いはあるものの、それぞれの優れた点と問題点を学び、日本の医療を客観的な視点から見つめ直すことができた。そして、将来を担う薬学生が、薬剤師像を明確に描くことができ、我々が日々努力することが必要だと強く感じることもできた。

【キーワード】セルフメディケーション、OTC薬、米国、海外研修

## P-16 ⑤クスリ教育関連

### 0歳児の母親に対する薬の情報提供についての検討

○片瀬 創平、柳瀬 智揮、川合 由起、岸本 桂子、福島 紀子

慶應義塾大学薬学部社会薬学講座

【目的】成人と異なり、乳幼児の薬の服用等には特別な配慮が必要である。本講座では 2009 年より、浅草薬剤師会の要請により、台東区の区民センターなどで、0 歳児の母親を対象に、乳幼児の薬の正しい使い方(薬育)についての「くすりのおはなし会」を実施している。日常よく起りそうな薬に関する出来事を「劇」にして、薬学部の修士学生、5 年生、6 年生らが演じて見せる方法で実施しており、事後調査でも高い評価を得ている。しかし、薬育の内容をはじめて聞いたという声が多く、母親にとって、子供の薬の正しい使い方をいつの時点で情報提供をする必要があるのか疑問となった。そこで、2012 年度から、事後調査の中で、薬育の内容が母親たちのニーズに合っているか、情報をいつの時点で提供すべきなのか探るために調査を行った。

【方法】「くすりのおはなし会」は、母親、父親、薬剤師が登場する芝居を主体とし、クイズや実演といった動的な要素を盛り込み、誰でもが理解できるような視覚的な手法を用い、粉薬やシロップ剤、坐剤などの薬について使い方の説明を行った。2012 年、2013 年に実施した合計 3 回の薬育の説明後に実施したアンケートの結果をまとめた。

【結果】坐剤をすでに使用したことがある母親でも、「坐薬の切り方、入れ方など」について、半数近い母親が今回の劇で使用方法を初めて知ったと回答している。また粉薬を使用したことがある母親も「薬を混ぜられる食事、混ぜないほうがよいもの、混ぜてはいけないものがある」ことや、「オブラートの使い方」などについて半数以上が初めて知ったと回答した。また劇で良かった点や知りたいことなどについての意見では、視覚的な手法を用いたことで十分な理解を得ることができたという感想や薬の飲ませるもしくははやめるタイミングはいつかを知りたいという意見があった。

【考察】多くの母親が薬の使い方を曖昧な知識のままで使用していることがわかる。服薬指導の時間が短いまたは内容説明が不十分ではないかと考えられるが、0 歳児が発病した時点で、服薬指導を聞く状況ではないかもしれない。早い時期から子どもが元気な時に情報提供の場を用意する必要がある。このような会は有用であると思われる。

【キーワード】 薬育 母親学級 0歳児

## P-17 ⑤クスリ教育関連

### 国際感覚を兼ね備えた薬剤師を育てるプログラム開発

#### —城西国際大学薬学部の取組—

○小澤実香、田嶋公人、合志雅美、奥山恵美、平田隆弘、山村重雄、秋元雅之  
城西国際大学薬学部 国際教育小委員会

**【目的】**日本だけでなく世界にも目を向け、薬学生・薬剤師に何ができるかを考える国際教育を城西国際大学（JIU）薬学部は2009年から展開している。2011年4月実施の本学薬学生の認知度・満足度調査において、学生の70%近くが国際教育の重要性を認識していた。しかし、自ら英語学習などを行っているかという問に対しては半数以上が取り組んでいなかった。そこで我々は、2011年4月に薬学教員7名からなる委員会（名称：JIU薬学部国際教育小委員会）を作り英語授業だけではなく、薬学生に国際言語英語への興味と継続的な学習意欲につながる環境醸成を試みた。

**【方法】**委員会は、学部長を筆頭に薬学英語や国際学会等に参加されている教員、そして、学生との接点が多い教員から構成された。活動は(1)国際教育セミナーの企画運営と(2)米国薬学研修を行った。また、これら活動評価は、本学薬学生の(1)TOEIC団体テスト受験者数と平均得点、(2)海外薬学研修や国際学会への参加学生数で判断した。

**【結果・考察】**活動(1)国際教育セミナーは、国内外から講師お招きしてこれまで8回実施した。活動(2)米国薬学研修は2010年から毎年2月2週間カルフォルニア大学リバーサイド校エクステンションセンターを拠点にし、現地の病院および薬局薬剤師、ファーマシストテクニシャンなどへの仕事観に関するインタビュー、そして、キャンパス内での英会話授業としてOTC医薬品を英語で服薬指導するロールプレイを行った。評価(1)TOEIC団体テストの受験者数は、2013年によく増加傾向が認められたが、総薬学生数に対する割合ではまだまだ低く、意識を行動に移す啓発は十分でないことが浮き彫りになった。評価(2)語学研修を含む海外薬学研修や国際学会等への学生参加数は、委員会発足前はわずか12名（総薬学生数における割合：2.0%）であったが、2013年においては26名（4.3%）に増大した。

**【結語】**「JIUスタイルの国際薬学教育を展開する」という共通目標を持った委員会が生まれ3年経過しようとしている。薬学生の内向き思考は改善傾向にあるが、国際社会で通用する薬剤師の素養を育てるための環境醸成は、まだまだ改善工夫が必要であることが判明した。将来、我が国で求められる薬剤師像を自ら描くためにも、国内外の先駆的取組を吸収できる柔軟かつ国際感覚豊かな薬学生・薬剤師を育てていきたい。

**【キーワード】**国際教育、薬学生、JIU薬学部国際教育小委員会、英語学習、海外薬学研修

## P-18 ⑥セルフメディケーションの実践

### 「城西国際大学 大多喜薬草園」におけるセルフメディケーション活動

根本 瞳、関川美沙、伊藤 碧、石井美咲、藤井茉以、松永奈緒、三輪野梨恵、関根利一、秋元雅之（城西国際大学 薬学部・薬草園）、  
懸川友人（薬学部 生理化学研究室）、渡辺淳一（同大 観光学部）

#### ■はじめに

学校法人城西大学 城西国際大学薬草園は、一般来園者の見学、本学「薬学部」等の見学授業など大学学生を対象とした教育・研究活動に利用されるほか、「城西国際大学公開講座」などの各種催しを実施している(1)。今回は、一般来園者、地域の方々への薬用植物、医薬品、食用植物に関する様々な情報提供活動について紹介したい。

#### ■見学案内による一般来園者への薬用植物・医薬品情報の提供活動

年間1万人以上の来園者があり、団体見学者には可能な限り見学案内を行なっている。特に高齢な方々のグループ見学者が多く、各種健康相談、薬に関する様々な質問、薬用植物の栽培法、利用法等に関する多くの情報提供依頼を受け、園職員、担当教員で対応するほか、卒業研究やゼミ活動中のなど薬学部学生もこれらの対応にあたっている。

#### ■ 地元の飲食店経営者、小学・中学・高校生へのセミナー、勉強会

大多喜町で飲食店を営む方々を対象にセミナーを定期的開催し、食用になる植物素材や地域活性化の方策に関する勉強会を行なった。地元産の野菜などに関する栄養学、薬学的な知識の普及につながった。また、飲食店で提供されるメニューに関するコメントを試験的に作成し店内に掲示し、消費者への利便をはかる試みも行なっている。

また、近隣の初等教育の生徒を対象とした見学会、高等学校の生徒向けには、文部科学省・理科教育推進事業「サイエンス・パートナーシップ・プログラム (SPP)」を通じた高大連携教育を実施し、医薬品や薬用植物に関する導入教育を行なった。

#### ■ カレンダー、写真集などの広報資材による普及活動

広報活動の一環として薬草園パンフレットを配布してきたほか、薬草園カレンダーや写真集の作成してきた。また、専門誌への投稿(2)や地元テレビ局による取材・出演を通じて来園者の誘導を図ってきた。今後もこれらの活動を継続し、有用植物や有毒植物に関する情報を提供していく予定である。

#### ■おわりに：薬用植物、医薬品、食の情報発信地としての薬草園

本園は、見本園として教育拠点の機能を果たすばかりではなく、地域への情報発信地として、積極的に薬用植物や医薬品、食として用いられる植物素材に関するキュレーションを行ない情報提供を行なうことで、食生活改善や健康指導の役割を果たしている。これら一連の活動も広い意味でのセルフメディケーション推進活動と言えよう。

(1) 薬草園 HP; <http://www.jiu.ac.jp/yakusouen>

(2) T. Sekine, Aromatherapy Environment, No. 58, p. 36 (2010)

## P-19 ⑥セルフメディケーションの実践

### 一般用医薬品販売後モニタリングのための「お薬服用記録手帳」の作成

○宮崎 智子、高松 真依、吉山 友二

北里大学薬学部臨床薬学研究・教育センター臨床薬学（保険薬局学）

【目的】一般用医薬品によると疑われる副作用は5年間で1,220例との報告があり、販売後の副作用早期発見が非常に重要であるが、消費者から情報収集を行う明確な方法がなく、販売後モニタリングが難しい点が問題として挙げられる。そこで本研究は、特にリスクの高い医薬品に指定される第一類医薬品について、消費者とかかりつけ薬剤師が一般用医薬品使用後の情報を共有し、薬剤師による販売後モニタリングに繋げるための「お薬服用記録手帳」を作成する事を目的とした。

【方法】2013年4月に新発売されたイコサペント酸エチル含有の中性脂肪異常改善薬エパデールTを対象とした。販売後モニタリングに必要な項目を、アドヒアランス、有効性、安全性として、それらを継続的に記録するためのお薬服用記録手帳と、薬剤師が手帳を活用する方法をまとめたマニュアルを作成した。

【結果】お薬服用記録手帳はA5サイズの手帳で、一般用医薬品の初回購入時に消費者に渡し、自宅で記入し、購入毎に薬局に持参する形式とした。使用状況記録ページは、左半分は消費者が自宅で記入する欄、右半分は薬剤師が店頭でカウンセリングしながら記入する欄を設け、医薬品販売後は中央から切り離して薬局で販売記録を保管することを可能にした。アドヒアランスの確認に加え、中性脂肪値などの検査値モニターや、副作用症状の有無などの確認を、薬剤師が漏れなく実施できるようにした。薬剤師用マニュアルは、お薬服用記録手帳の使用法説明に加え、店頭での相談と販売後モニタリングを補助するツールとして、消費者への指導例を簡潔に記載し、販売の可否や受診勧奨の目安を文献等から引用してまとめた。

【考察】薬剤師が一般用医薬品使用後の情報を入手することができれば、販売後モニタリングによる副作用の早期発見や、薬局に保管する販売記録の情報を用いた迅速な相談応需に繋がれると考えられる。本研究で作成したお薬服用記録手帳は、消費者と薬剤師の両者の手元に一般用医薬品使用後の記録が残り、簡便に情報共有できる事に有用性があると考えられる。今回は対象医薬品について検討したが、他の一般用医薬品においても応用可能な方法であると考えられるため、今後も引き続き検討を継続していきたい。

#### 【キーワード】

一般用医薬品、販売後モニタリング

## P-20 ⑥セルフメディケーションの実践

### 小児に用法を有する一般用医薬品のかぜ薬（内用）の選択に果たす 薬剤師への期待と役割

○川上美好、下澤りえ、吉山友二

北里大学薬学部臨床薬学研究・教育センター臨床薬学（保険薬局学）

【背景・目的】セルフメディケーションの中心は一般用医薬品であり、薬剤師はその適正使用の支援に重要な役割を担っている。現在販売されている一般用医薬品のかぜ薬（内用）は約820製品あり、そのうちの約8割が小児の用法を有する。諸外国では、小児へのかぜ薬の使用について規制や通知が出ている国がある。日本では小児への販売は規制されていないが、厚生労働省から通知がでたこともあり、さらなる適正使用が求められている。成分や剤形の違いなど多種多様な一般用医薬品の適正使用において、製品選択が重要となるが、特に小児のかぜ薬については、年齢・症状・嗜好など選択する上で様々な項目を考慮しなければならない。そこで今回、薬局薬剤師へ一般用医薬品販売に関するアンケート調査を実施し、その現状を分析した。

【方法】東京都薬局機能情報提供システムから「一般用医薬品の相談」を実施している都内3区327薬局の薬剤師へ、小児への一般用医薬品販売の現状について郵送によるアンケート調査を行った。

【結果】アンケートの回収率は38.5%であった。一般用医薬品を販売しているうち、小児の用法を有するかぜ薬を取り扱う薬局は59.1%（69/117）であり、そのうち小児に関する相談を受けたことのある薬剤師は76.8%（53/69）であった。消費者は薬剤師が勧めた製品を選ぶ場合が67.9%と最も多かった。薬剤師が消費者から相談される項目としては、効能効果・症状に次いで剤形・味に関する項目が多かった。情報提供に関しては、薬剤師の約80%が消費者に対して口頭で特別な指導をしており、すべての製品に関して指導を行っている場合が多いこともわかった。その一方で薬剤師は、製品の選択時にパッケージや添付文書を情報源としている場合が76.5%であり、83.0%の薬剤師がデータベースなど製品情報を体系的にまとめたツールの必要性を感じていた。

【考察】今回の調査結果から、小児の用法を有するかぜ薬を取り扱う薬剤師が、消費者から購入の相談を受けることが多くあり、一般用医薬品の適正使用と情報提供における薬剤師の役割が明らかとなった。今後これらの結果を踏まえ、薬剤師の日常業務に役立つ、剤形や味など小児の嗜好を含めた製品の情報を体系的にまとめたデータベースを作成する予定である。

【キーワード】セルフメディケーション、一般用医薬品、小児



## フレンチマリーゴールドの抗炎症成分に関する研究

○安川 憲<sup>1</sup>, 笠原義正<sup>2</sup> ( <sup>1</sup>日本大・薬、<sup>2</sup>山形衛研)

### 【目的】

我々はキク科植物の花の抗炎症効果について研究を進めている。フレンチマリーゴールドは、英国においてホメオパシー医療施設において軟膏剤として、皮膚の炎症に使用されている<sup>1)</sup>。既に、フレンチマリーゴールドのエキスについて、抗炎症効果を示すことを報告している<sup>2)</sup>。今回、活性成分として、patuletin とその配糖体 patulitrin を単離同定したので報告する。

### 【方法】

フレンチマリーゴールド (*Tagetes patula* L.) の花のメタノール抽出エキスを各種クロマトにより分離精製し2種の活性成分を単離した。

カラゲニン (CAR) とヒスタミン (HIS) が誘発する炎症に対する抑制効果：マウスの足蹠に起炎物質 CAR 又は HIS を皮下投与し、その後経時的に足蹠の厚さを測定した。検体は、起炎物質投与の1時間前に経口投与した。Arachidonic acid (AA) と 12-*O*-tetradecanoylphorbol-13-acetate (TPA) が誘発する炎症に対する抑制効果：マウスの耳殻に起炎物質 TPA 又は AA を塗布し、それぞれ6時間後、1時間後に耳殻の腫脹を測定し対照群との比較により抑制効果を算出した。検体は、30分前に同一部位に塗布した。

### 【結果】

単離した化合物は、各種スペクトルデータを解析することにより、patuletin とそのグリコシドである patulitrin と同定した。

Patuletin と patulitrin は、共に経口投与により CAR 及び HIS が誘発する炎症を用量依存的に抑制した。Patuletin と patulitrin は、局所投与により TPA 及び AA が誘発する炎症を用量依存的に抑制した。

### 【考察】

今回、フレンチマリーゴールドの成分探索を行い、有効成分としてフラボノイド patuletin とそのグリコシドである patulitrin を単離同定した。これらのフラボノイドは、局所投与により用量依存的に抗炎症効果を示すことが判明した。フレンチマリーゴールド軟膏剤の有効成分の1部が、これらフラボノイドであることを明らかとした<sup>3)</sup>。

1) R. A. Hadfield, *et al.*, *Foot Ankle J.*, 2008, **1**, 1.

2) Y. Kasahara, *et al.*, *Phytother. Res.*, 2002, **16**, 217-222.

K. Yasukawa, *et al.*, *Int. J. Inflammat.*, 2013, **2013**, in press.

## P-22 ⑦その他

### 「ありがとう」といわれる薬剤師を目指して

○田中友春、菊嶋一枝、恩田乾次郎、秋葉保次  
株式会社ウイングメディカル

【目的】医療現場におけるコミュニケーション能力の向上が指摘され、臨床薬学を重視した6年制薬学教育を受けた薬剤師が、2012年から医療現場に登場した。このような時代背景を受け、これまで長年現場で患者と向き合ってきた経験を持つ薬剤師の考えはいかなるものか調査を実施し、その結果を報告する。

【方法】アンケート調査

実施期間：平成25年4月から平成25年7月

調査の実施方法：外部の研修を受講した薬剤師に対しアンケート調査を行った

対象者の年齢層：45歳から60歳

有効回答数：352人

【結果】アンケートの集計結果は以下の通り。

総数352人の内、89.2%（314人）が在職中であり、その就業先の業態は保険薬局が45.8%（144人）、病院15.9%（50人）、調剤+OTC12.4%（39人）。

「患者に向き合う方法」については、男女共に年齢層によって違いが出たが、「薬剤師として最も求められるもの」については、「医薬品に関する知識」が各年齢層において1位という結果となった。

【考察】国民のセルフメディケーションを専門的な立場からサポートし、その質を高めることは薬局薬剤師の重要な役割と謳われている。薬剤師が患者に対し良好なコミュニケーションがとれると、服薬状況も格段にアップする。また、薬以外の健康全般についても相談を受けることが出来る薬剤師は、地域の人々にとって最も身近な医療従事者である。これからの薬剤師は、自分の考えを患者や医師に伝える能力が必要とされ、それを養うために6年制薬学教育の中で新しいカリキュラムが導入されている。この教育を受けた薬剤師を迎え、指導する立場にある薬剤師は、患者インタビューにおけるコミュニケーション力について各年齢層共に重要だと理解しているが、年齢層がアップするにつれて、「患者を思いやる心」を重視するという回答が男女共に上位を占めている。また、年齢層が下がるにつれ、医薬品に関する知識は持っている当然のことであり、敢えて「コミュニケーション力の必要性を重視している」との回答が多く見られた。

【結語】これまでの3年に亘る調査を総合しても、年齢層が上がるほど、コミュニケーション力は日頃の業務の中で身につけるものという考えが主流だが、それは技術ではなく「思いやり」（倫理観）が大切との考えが経験に基づく答えだと推察する。

【キーワード】患者を思いやる心、薬剤師の役割

## P-23 ⑦その他

### OTC 医薬品説明文書に含まれる医療用語の理解度に関するアンケート調査

東京薬科大学薬学部 ○倉田香織、高橋笙子、今野菜穂、渡辺謹三、土橋 朗

【目的】一般用医薬品の利用促進において、正しい情報の普及とともにその情報の理解度の把握が効果的な服薬指導の実践には必要不可欠である。わが国の識字率は高く、ヘルスリテラシー研究についても公衆衛生分野の一部の研究者が取り組んでいるに過ぎない。しかし、社会構造の複雑化が進行している現在の状況では、ヘルスリテラシー格差が少なからず存在している。我々は、一般用医薬品の推進においてくすりに対する正しい認識を広めるために、簡単な質問で患者が有している服薬に関する基本的な考え方を探り、提供する情報を絞り込むことができるツールの開発を目的とした検討を行ってきた。医薬品の説明に用いられる医療用語は、文字と音が一致させられなければ、同じことを説明していても情報の欠落や誤解を生む特性が日本語にはある。そこで、本研究では、医療用語に対する理解が口頭と説明文書で一致するかを読み方テストを用いて検討することを目的とする。

【方法】WORDによる文書作成法をテーマとする情報リテラシー演習の授業の一環として、薬学部1年生219名に対し、作成見本として用いる模擬的な添付文書に登場する25の医療用語を漢字で提示し、その読み方を解答させた。さらに、8の医療用語（鎮咳、解熱、去痰、黄疸、浮腫、既往、潰瘍、梗塞）について、新宿駅西口で開催されたOTC医薬品普及イベントの参加者を対象に、同様の調査を行った。

【結果】鎮痛、甲状腺、発疹、嘔吐、重篤、末梢の正解率は90%を超えていた。緑内障は、正解率は86.7%と高いが、「緑」を「ふち」や「えん」などと読み間違えているものが多かった。緑は1文字であれば読み間違える事はないため、「緑内障」を知らないために間違えた可能性が高い。正解率が低い順に鎮咳、塞栓、黄疸、膠原病、去痰などが30%未満であった。「鎮咳」を「ちんせき」と解答した学生は多いが、「咳」を「せき」と読むことができていることから、文字から意味は理解していることが読み取れた。しかし、「ちんがい」という口頭での説明は理解していない可能性がある。本検討は、WORDでの漢字入力の際に、どのようにローマ字入力するかを検討したものであるが、音と漢字が一致しない医療用語を読みのおりに入力することはできないことから、口頭での理解と文書による理解とでの一致を検討することが可能であると考えられる。

【結語】セルフケア、セルフメディケーションにはヘルスリテラシーの向上が必要不可欠である。口頭での服薬指導や文書による説明を通して、医療用語をいずれの方法でも理解できるように識字率をあげていくことが重要である。

【キーワード】ヘルスリテラシー、説明文書、医療用語、アンケート、OTC医薬品

## P-24 ⑦その他

### 症例コンテンツの知識情報を活用した地域介護支援システムの研究開発 ～介護認定調査項目と患者症状の融合～

東京薬科大学 薬・○加藤哲太、山田純司、高木教夫、高木慶子、  
三洋薬局・福田早苗、(株)シーイー・フォックス・杉山康彦

【目的】高齢者への適切な医療の確保や医療費削減に関する対策は急務である。政府はそれらを目的に高齢者に関する疾病の早期発見や治療を可能とする「要介護認定」や「生活機能評価制度」等を積極的に改革している。しかし、要介護認定受給者数は著しく増加していることを考えると、制度内容は必ずしも目的に近づいているとは考え難い。当研究室は、これまで薬剤師の問診スキル向上のため「症例学習システム」を構築してきた。現在、開発してきた症例コンテンツの知識情報データベース（症状データベースと患者特性データベース）をもとに、高齢者の症状を的確に捉えた「介護支援システム」の構築を試みている。本システムは問診（要介護認定の調査）を行い、認知症に関する発症の可能性を自動的に分析することを目的としている。今回、本システムを使用し実際の臨床データを解析することでシステムの有用性を検証した。

【方法・結果】iPad を利用し、認定調査の結果を身体的症状データベースに登録する。その後、登録された高齢者の症状と、疾患可能性データベースで定義した疾病の症状や重症度（点数化）をもとに疾患可能性分析プログラムが疾患の可能性を分析する。本分析では、疾病(今回は認知症)の発症を肯定する項目の加点、疾病を否定する項目の加点方式により疾病の可能性を導き出す。その結果、高齢者の状態を受診勧奨、経過観察、問題なしの3種類に分類することが可能となった。

【結語】本研究開発は、患者の状態から想定される疾病について数値化したデータベースと高齢者の特徴、身体機能、生活機能、認知機能、精神・行動障害等（認定調査票の調査項目）を組合せることにより、高齢者の状態を類別化し（受診勧奨、経過観察、問題なし）、経時的な追跡をするものであり、従来の定点的な介護認定と比較して、より高齢者の実態に合致した支援を可能とするものである。今後、本研究開発の成果（地域介護支援システムで得られたデータ）をさらに蓄積し解析することにより、きめ細かな介護医療に貢献できると推測している。

【キーワード】介護支援システム、認知症、要介護認定

## P-25 ⑦その他

### 一般用医薬品販売の接客環境および業務実態の変遷に関する定点調査

○懸川 友人、城西国際大学薬学部  
今井 聡美、納得して医療を選ぶ会

【目的】我々は平成18年度に「制度改正前の一般用医薬品販売における薬剤師の接客環境と業務実態」について首都圏の約80店舗を覆面調査し、第6回の本学会において報告した。今回は制度改正により業務実態がどのように変化し定着したか、同一店舗について調査を行い比較検討し、一般用医薬品販売制度定着状況調査（平成21年より）のデータと対比させ、制度改正が首都圏の薬剤師および登録販売者の業務にもたらした影響及び平成18年の業務実態に比べ改善された点、さらに改善が必要な点を考察する。

【方法】一般用医薬品の販売環境の調査：

- 1) 一般用医薬品販売環境の現地調査。薬局・薬店（一般販売業店舗）における一般用医薬品の販売環境（立地・周辺環境、I類医薬品取扱いの有無、陳列、掲示、情報提供・相談体制、専門職の配置など）を現地調査する。
- 2) 平成18年度および25年度の定点データと一般用医薬品販売制度定着状況調査の比較検討。薬事法改正によって変化した接客環境と業務実態について、明らかにし、さらにその要因を探る。調査対象：平成18年度および25年度の独自調査データおよび平成21年～平成24年の一般用医薬品販売制度定着状況調査（厚生労働省）の結果を比較検討する。
- 3) I類解熱鎮痛薬の購入を希望するが本来なら販売を見送るべき客の「背景」を設定し、口頭質問による調査を行う。

【結果・考察】1) 平成18年度および25年度の定点データ比較により、一般用医薬品販売環境は、チェーン毎の差異より店舗毎の差異が広がっていた。2) 厚生労働省一般用医薬品販売制度定着状況調査（平成21年～平成24年）における千葉県標本と、今回調査した千葉県内の店舗とでの専門家の在店する割合に差が見られた。これは人口規模別の分布が大幅に異なったことによると推察され、医療過疎地域における専門家の不足を反映していると考えられる。3) I類医薬品を希望するが本来なら販売を見送るべき客へ販売する割合は、平成18年度の割合に比べ25年度で増加する傾向が見られたことから、観察数を増やし、継続的に検討する必要がある。

【キーワード(3～5単語)】一般用医薬品販売制度、I類医薬品

この調査研究は公益財団法人一般用医薬品セルフメディケーション振興財団平成25年度調査・研究助成により行われた。

## P-26 ⑦その他

### 日本と米国のアレルゲンリストを用いた化粧クリーム中の成分について

○北詰ゆみ、吉田武史、川合由起、岸本桂子、福島紀子  
慶應義塾大学薬学部 社会薬学講座

【目的】近年化粧品による複数の健康被害が報告されている。国民生活センターによると、過去五年間で危害発生件数の上位3位に化粧品が入っており、特に多いものは化粧クリームによる皮膚炎である。しかしその原因が特定されていないものも多い。化粧成分では防腐剤や抗酸化剤、色素、香料などに起因する接触皮膚炎が報告されている。そこで、化粧クリームの成分中にどのようなアレルゲンが含まれているか日本と米国のアレルゲンリストを元に調べ、販売に関わる薬剤師が関与できることがあるか検討する。

【方法】今回は総売上が上位5位以内で全国に1千店舗以上あるドラッグストアのうち化粧品販売数が多く、ネットで化粧品の扱い、詳細な成分表示をしている企業のネット上で見られる化粧品を対象とした。ジャパニーズスタンダードアレルゲン(JSA)とNorth American Contact Dermatitis Group (NACDG)、American Contact Alternatives Group (ACAG)のアレルゲンリストを用いて上記化粧品の中から化粧クリームを抽出し、その中にどれだけのアレルゲンが含まれているかを調査した。

【結果】化粧クリーム164製品中133が全成分表示され、女性用が127、男性用が6あった。JSA25種のうち4種が含まれ、多いものはパラベン(85製品)と香料(35)だった。NACDG09-10とACAG計89種で見た所、19種のアレルゲンが含まれ、パラベンと香料の他にもフェノキシエタノール(61)、PG(48)、トコフェロール(43)が多かった。

【考察】一番多いのは防腐剤のパラベン(別名パラオキシ安息香酸エステル)。パラベンヘアカラーの有効成分のパラフェニレンジアミンと交差反応を示すという報告があるため、注意が必要である。香料は具体的な成分名が書かれておらず、一つの香料に陽性反応を示す人は香料が入っている物全て使えなくなるため、香料も具体的に表示されることが望まれる。アメリカのアレルゲンリストにあり、JSAにないものは16種あった。皮膚炎の原因がなかなか特定できない消費者がいた場合、これらも考慮する。化粧品を扱うドラッグストアや薬局に勤務する薬剤師は、消費者がなんらかのアレルゲンに陽性の場合、交差反応を起こす物質も除外して商品を勧める必要がある。

【キーワード】化粧品 成分 アレルゲン クリーム



## 謝辞

第11回日本セルフメディケーション学会の開催にあたりまして、参加各位をはじめ多くの方々にご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。また、御協賛と広告掲載により多大なご支援を賜りましたので、併せて御礼申し上げます。下記にご記載させていただき御礼にかえさせていただきます。

2013年10月5日

第11回日本セルフメディケーション学会年会長 懸川 友人  
認定NPO法人セルフメディケーション推進協議会会長 池田 義雄

### -----広告協賛企業・団体-----

エーザイ株式会社	エスエス製薬株式会社
クラシエ薬品株式会社	スギホールディングス
ゼリア新薬工業株式会社	ファーマライズホールディングス
株式会社 クリエイト エス・ディー	株式会社 CFS コーポレーション
株式会社アインファーマシーズ	株式会社ココカラファイン
株式会社スマイルドラッグ	株式会社タニタ
株式会社ツルハホールディングス	株式会社ドラッグマガジン
株式会社千葉薬品	株式会社南江堂
株式会社明治	救心製薬株式会社
佐藤製薬株式会社	小林製薬株式会社
全薬工業株式会社	大正製薬株式会社
日本漢方協会	武田薬品工業株式会社
方術信和会	薬樹株式会社
有限会社ネオメディカル	

以上 27 企業・団体（五十音順）

### -----協賛企業・団体-----

エクセルエイド少額短期保険株式会社